慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中世における本地物の研究(七) : 阿弥陀の本地
Sub Title	
Author	松本, 隆信(Matsumoto, Ryushin)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	1982
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.19 (1982.) ,p.1- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	阿部隆一名誉教授追悼記念論集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-00000019-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中世における本地物の研究（七）

――阿弥陀の本地――

松本隆信

一

「阿弥陀の本地」または「法蔵比丘」の名で知られる作品は、阿弥陀三尊と薬師如来の前生として語られる物語である。天竺の王子と王女を主人公に繰り広げられるこの哀れな恋物語は、他の室町期の物語草子にも、恋の手本としてしばしば引用されている。広く人口に膾炙していた物語である。

本作に関しては、夙に今野達氏が物語の構成要素として、「今昔物語」巻五第二十二話「東城国皇子善生人通阿就頭女語」のほか、「阿弥陀鼓音声王陀羅尼経」等を挙げられたが、[注1] さらに近年、その今昔説話の原拠に「覚禅抄」所引の「大乗毘沙門経」なる偽経が存在したことを、本田義憲氏が指摘された。[注2] 物語の素材ともいうべき説話がほぼ明らかである点で、同じく仏典の説話が骨格をなす「熊野の本地」と共に、本地物成立の契機を探る上にも重要な意味をもつ作品と考えられる。

本作は、諸伝本の間に見られる本文の相違が甚だしい。「熊野の本地」も伝本が多く、異同が複雑であるが、本作は現存本の数の上では及ばないものの、相違の程度はそれ以上と言える。本稿では、それら諸本間の異同の実態を明らかにすることに中心をおいて、いくつかの問題に触れてみたいと思う。

本作の管見に入った諸本は次の通りである。

(イ)あみだの本地物語（仮題）　天文二十一年写本　大一冊
　赤木文庫蔵（説経正本集二・室町時代物語大成一所収）〈天

文〉

(ロ)阿弥陀本地（仮題）　天文二十一年本の江戸中期転写本　大一冊　赤木文庫旧蔵（室町時代物語集四所収）

(ハ)あみた本地（仮題）　江戸初期写本　横一冊　武田祐吉氏旧蔵（室町時代物語集四所収）〈武田〉

(ニ)はうさうひく（題簽）　江戸前期奈良絵本　横二冊　天理図書館蔵〈天理〉

(ホ)ほうさうひく（題簽）　江戸前期写本　特大一冊　天理図書館蔵

(ヘ)ほうさうひくのさうし（外題）　正保三年写本　半一冊　京都大学図書館蔵〈京大1〉

(ト)天竺之物語（扉題）　江戸前期写本　大一冊　京都大学文学部蔵〈京大2〉

(チ)あみたの本地（題簽）　江戸前期奈良絵本　横三冊　慶應義塾図書館蔵（影印室町物語集成五所収）〈慶應〉

(リ)あみたの本地（扉題）　室町末期写本　大一冊　学習院大学国文学研究室蔵（室町時代物語大成一所収）〈学習院〉

(ヌ)みたのほんかい（題簽）　江戸初期写本　特大一冊　筑土鈴寛氏旧蔵（室町時代物語集四所収）〈筑土〉

(ル)あみたの御本地（内題）　承応元年山本長兵衛刊絵入本　大二冊（上巻欠）　杉浦丘園氏旧蔵

(ヲ)同右後印本（刊者なし、刊年のみ）　大三冊　赤木文庫蔵（室町時代物語集四所収）〈刊本〉

諸本の末尾に付した〈　〉は、本稿で使用したその本の略号である。右の諸本のうち、(ロ)は(イ)の忠実な転写本、(ニ)と(ホ)は本文が全く同文であるので、(ロ)と(ホ)は考察の対照から除外した。また、(ル)の刊本の初印本は完本をいまだ見出していないので、(ヲ)の後印本に拠った。以下、非常に長くなるが、物語の構成場面を逐一追って、諸本の本文を比較検討してみる。

二

(1)序文

〈天文〉　そもく、あみたによらいの、しやうかくならせ給ひしゆらひを、くわしくたつぬるに、かたしけなくも、ほうさうひくの、さむかいのしゆしやうを、すくはんかためなり

〈武田〉〈天文〉と同趣旨の文であるが、やや簡略。

〈京大2〉　それ天ちくは四十はつ天なり、国は十六の国なり、とう天くう、さい天くう、なん天くう、ほく天くう、ゑ天くう、はらなみこく、ひしやりこく、とうしやうこくとて、国にあまたあり

〈慶應〉〈京大2〉とほぼ同文。ただし「天くう」は「天ちく」とある。

〈学習院〉〈京大2〉と同趣旨の文であるが、国の名が多く、やや叙述が長い。

〈刊本〉　それおもんみれば。六道りんゑは。やうかうるらうあらたまり。へんする。ちの。はしめ。をはりもなく。ゆふく たる。うゐのてんへん。いつれのときか。まつべき。まんく

たる。しやうしの。さかひ。さらにかぎりを。しらず。しつかに。此身かへりみれば。きやうちうさくわ。こと〳〵く、三づにしづむ。こういんなり。とゝかんと。すれば。さかりなるひに。たきゝをまし。また、たつせんと。おもへば。おつる露に。雨をそふるにゝたり。かたちは風。雲のことし。つら〳〵当座の。くわをあんするに。たん〳〵。をのつから。きもにめ[A]いず。わかん[B]。はねん。いづれのところにか。をもむかん。あるひは。みやうくわ。身をやくとくちうをすい。ほねをうかつて。けむにんかはをさく。あるひは。こす[C]。めすに。かしやくせられ。あはうらせつに。かしやくせらるゝ。すへて。これを思ふにも。ちごくのくるしひ。むりやうなり。かき。のかなしみ。むへんなり。人けんにくあり[D]。ていしやうに。五すいあり。ゑりさむゑむりの道をおもひさふらへば。かれもかたし。これも。かたし。こゝに。あみたのほんくわんあり。みやうかうをとなふれは。むりやうをつこうのつみをけし。一ねんのあひたに。十万おくとの。さいはうにまいり。なかく。三づをはなる。しかれば。大論経にも。ねんころに。さんたんす。しよふつも。したをのべて。いねうしたまふ。そもく。あみだに。なり給へるゆらひを。たつぬるに。まつせの。しゆしやうを。あんやう。じやうどに。わうじやうを。させんとなり。あ[E]みだの。ほんぐわんに。もれるものはあらじ。もし。みだのほんぐわん。もれるものあらは、たしやうかうをふるとも。うかふことはあらじ

〈天理〉〈刊本〉と同文。ただし傍線の五個所に左の違いがある。

A身にめいす　Bわかねん　Cこくそつにちやうちやくせられ　D人間に八く有てんしやうに　Eナシ

〈京大1〉〈筑土〉　序文ナシ

以上のように、〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉の三本は、〈天文〉〈武田〉とは全く別の内容を叙べた文であるが、これは序文というには当らず、次の条に含めるべきかもしれない。〈刊本〉〈天理〉の二本は著しく長くなっているが、終りの方の一節「そもく。あみだに。なり給へるゆらひを。たつぬるに。まつせの。しゆしやうを。あんやう。じやうどに。わうじやうを。させんとなり。」の一文は、〈天文〉〈武田〉と近いところを見ると、〈天文〉系の本文を増補して、説教色を濃厚にしたごとくにも見える。そして〈天理〉は、次の条からは〈刊本〉と同文の個所と異文の個所とが入り交ってくるので、ここだけで〈刊本〉との関係を言うことはできない。

(2)せんしやう太子が、隣国の姫宮あしゆく夫人の噂を聞き、見ぬ恋にあこがれて、王宮を忍び出る

〈天文〉　そのゆへは、さいてんちくにくにあり、なをはとうしやうこくとそ申ける、かのくにのみかとをは、月さうてんりむしやうわうとそ申たてまつる、わうし一人をはします、おん名をはせんしやうたいしと申ける、いまたきさきのみやもましまさす、ならひのくにさいしやうこくのみかと、せんしむわうの

ひめみやに、あしゆくふにんと申ける、ようかんひれいにして、ならひなきほとのきさきにてそをはします、ゆきのはたゑしろけれは、月のひかりにくまもなし、らんしやのにほひかうはしく、御すかたをものにたとふれは、秋のはらのをみなへし、つゆをもけなるおんすかた、まことにならふ人あらしとそおほゆる、此御ありさまを、いかなる人か申けん、たいしはほのかにきこしめし、御こゝろもそらにあくかれて、ふししつみ給ひける、くきやう見たてまつりて、たゝつねの御事とはおほえす、いかさま御こゝろのうちにおほしめす御ことあるへし、むかしよりいまにいたるまて、さるためしおほくはんへりけり、なにかくるしかるへき、おほしめし候はん御ことを、くわしくうけたまはり候はんと申けれは、たいし此よしきこしめして、つゝむとすれと恋のみちあらはれて、申けるこそはつかしけれ、いつそやのころ、たゝかりそめにきゝしことを、たつねはやとおもひ候へとも、さいしやうこくへのみちのほとをしらぬそと、おほせありけれは、大しん申されけるは、さいしやうこくへのみちのほとは、わつかに三ねん三月とそうけ給り候ひぬ、さてはやすきほとのみちなりとて、人にもおほせられす、たゝ一人とうしやうこくのたいりを、しのひいてさせ給ふことこそあはれなれ

〈武田〉 国名・人名は〈天文〉と同じ。ただし、太子の母について「はゝのきさき、よくしようめうけんてん人と申」とある。その他の叙述内容も〈天文〉と変らないが、あしゆく夫人の容姿を形容する文や、恋の病に臥した太子に公卿が心の中を尋ねる記事がなく、総じて簡略になっている。

〈京大1〉 国名・人名は〈天文〉と同じのほか、せんしん王の后（あしゆく夫人の母）について「きさきの御なをは、あさうきのみやと申」とある。叙述内容では、太子に三千八百余人の妃をそなえたが、気に入った女性がなかったとか、大臣が太子に、あしゆく夫人を迎えるように勧めると、太子は「はるゝくむかへとりても、きくにすかたのをとるならは、むなしくせんもなさけなし」と言って、西城国へ旅立つというような、独自の記事が見られる。

〈天理〉 太子の母后を「しゆせうめうけんふにん」とし〈武田〉に似る。その他、東城国の王、太子の名は〈天文〉と同じであるが、西城国の王、姫宮の名は記さない。姫宮の容姿を形容する文はあるが、〈天文〉とは全く異なる。また、恋の病に臥した太子に臣下が心中を尋ねるという記事もない。

〈京大2〉 中にも、さひしやう国のわうをは、くわひさうしやりんしやうわうと申けり、されは御かとは、天ににしきのしやうをはり、ちにはめなふをしき、国にゝもまたならひなきけんしやうわうとてをはします、きさきのなをは、めいやうふにんと申けり、此なかに一人のわうしおわします、御なをはせんしやうたいしと申なり、されは此御たいしは、しいかくはけんにくらからす、くわてうふう月にこゝろをすましておわします、へきやうたいしんならひなしとて申ける、かやうにいみしき御たいし、御としはや十六才にそならせたまふか、いまたさひあいのきさきもおわしまさす、ならひに国あり、とうしやうこく

と申ける、かA国のわうをは、あさうきの宮とそ申ける、此御中にひめ宮一人をはします、御なをはあしゆくふ人と申ける、かのひめ宮の御かたちいふにましまし御事、三十二さうしまあふこん、八十しゆかう、ひやくしゆのかうかん、人にすくれさせたまひて、一ゑんほたいの雨のさた、十せん九かいのいけのおもて、かほとのびじんおわしまさじときこへけり、あるとき、たいしかのひめ宮の御事を、かせのたよりにきこしめし、みぬこひにあこかれさせたまひて、日〻の御しよいしをとゝめ、はる〳〵たいしにふしたまふ、御かとをはしめたてまつり、くきやう天しやう人、ひやつくわんけいしやうにいたるまて、これをなけかぬ人はなし、こゝにとしたけたるたひじん一人、たいしの御まへにかしこまり、つく〳〵とみたてまつり、いたはしのわかきみや、つら〳〵物をあんつるに、うき世の中のありさまは、こひとむしやうにてとゝめたり、たいしをよく〳〵み申に、たゝの御のふにてましまさすと申、たいしきこしめせ、こひにあまたのしなあり、あふこひ、あわぬこひ、たがひに心をかよへ共、おかのくすはもあきかせに、うらみてあわぬこひもあり、くものかけはしたかくして、ふみもつたへぬこひもあり、たとへはこひのしな〳〵、さま〳〵におゝくとも、又みぬこひにまよふには、しゆきやうのたひにしくはなし、わかきみとこそ申されける、たいしきこしめし、さてはしゆきやうにいつる事かとおほしめし、いかにやたいじん、これよりしてとうしやうこくのみちのほと、いかはかりぞとのたまへは、大しん此よしうけたまはり、たいしの御心の内をはしらすして、ありのまゝにそ申ける、のふたいしきこしめせ、とうしよふこくゑのみちすから、たゝかりそめとおもふ共、三ねん三月とこそうけたまはりて候へと申せは、たいしこのよしきこしめし、よしやそのみち、五ねんにも十年にもゆかはゆけ、こひしき人にあふならば、さこそはうれしかるへけれと、さらはしゆきやうにいてはやとおほしめし、あるよ人めをしのひ、つたのおい、しやもんのすかたにひきかへて、うきすみそめのけさころも、こんずわらんぢしめはきて、すみなれしさいしやうこくのだいりをは、とあるよのまにしのひ出、とうしやうこくのたひのみち、おもひみたれさせたまふ御ありさま、たとへんかたもなかりけり

さるほとに大りには、ちゝのたいわうをはしめたてまつり、きさきの宮の御なけき、たとへんかたもなかりけり、されはくきやう天しやう人、ひやつくわんけいしやうにいたるまて、これをいかにと申て、こくとの内をたつねまいらせけれとも、さらに御ゆくゑましまさす、なく〳〵たいりにかへりて、みかとにそうもん申けれは、大わうもきさきのみやも、御おもひにしつみたまひ、御身はかけろふとなりはてゝ、なけかせたまいけるほとに、いたはしやきさきの宮、おしかるへき御よわひかな、三十一と申には、そうろのことくきへたまふ、みかとの御なけき申も中〳〵をろかなり、いたわしやみかとわ、御たいしにはいきてのわかれ、きさきにはしゝてのわかれ、ひとかたならぬ御おもひに、御くらいをすへりおわします、ほうわうとならせたまふ、大りのひかしに山あり、さいりんし、ちくりんし、か

うりんしとて、三つの寺おそたてられける

〈慶應〉〈京大2〉と細部の異同はあるが、同系の本文である。〈京大2〉に多い誤脱を補う所も多い。たとえばAの個所は、

このくにのあるしをは、せんしんわうとそ申ける、または、あそうきのみやとも申なり

とある。その他の国名・人名は〈京大2〉と同じである。

〈学習院〉 これも〈京大2〉と同系の本文であるが、やはり細部の異同は多い。国名・人名も〈京大2〉と同じで、Aの個所は左のようにある

みかとの御なおは、せしんわうと申、きさきおは、あそうきのみやと申たてまつる

その他、本書独自の特徴としては、太子が国を忍び出る時に、次の歌をよんだことを記す。

色ふかく、染たるたひの、から衣、帰らんまての、形見ともみよ

〈刊本〉〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉の三本と同類の本文を有し、母后の死や父王の出家、三寺の建立の記事もある。しかし、その他次のような独自の増補部分もある。

そも〳〵。てんちくの。かたはらに。さいしやうこくと。いふ国あり。此くにのあるしを。くはつそう。天りんしやう王と申奉る。此きさきの御名をは。めいよぶにんと申。しかるにみかどは。そらには。にしきのきちやうをはり。地にはめいなふをしき。四方に。四まんのくらをたて。御殿はくうてん。らうかくにたて給ふ。あるひは。から木をもって。たてたまふも有。こかねの門もあまた有。いつれにつきても。しつちんまんはうみち〳〵て。くにゝおゐても。ならびなき。わうゐんにてまします。

右の傍線の部分以外は〈京大2〉や〈慶應〉に近い文であるが、傍線部分は〈刊本〉独自の文である。さらに、これに続いて〈刊本〉は、王と后との間には子が無かったので、天に祈ると后に懐妊の験があり、臣下たちが喜んで火の祝のとんどを始めた。程なく男子が生れ、せんちやう太子と名づけられた、と叙べる。この申し子の記事も他の諸本には見えない。

〈筑土〉 太子の国を西城国、姫宮の国を東城国とするのは、〈京大2〉以下の諸本と同様であるが、本文はどの本にも似ていない。全体に叙述が簡略で筋書風である。母后の死、父王の出家、三寺建立の記事はない。

以上のように、国名や人名に関しては、〈天文〉系と〈京大2〉系とに二分される。太子と姫宮の国については、「今昔物語」の善生人説話、およびその原拠とされる「覚禅抄」所引の「大乗毘沙門経」においては、善生人が東城国、阿就顎女あるいは阿鐵女が西城国であり、〈天文〉系がこれに一致する。また太子の父の名は、月さう転輪聖王の他は、その誤読あるいは誤写と思われるものであるが、母の方は「よくしようめうけんてん人」「しゆせうめうけんふにん」と、「めいやうふにん」の二種に分れる。これも、今野氏が指摘されたように、「阿弥陀鼓音声王陀羅尼経」に、月上転輪聖王を父とし、殊勝妙顔皇后を母とする憍尸迦という王子が、出家して法蔵比丘と名のったと

あるのに拠ったとすれば、〈天理〉が正しいことになる。一方、姫宮あしゆく夫人の父は「せんしん王」一種であるが、母については、〈京大1〉と、〈京大2〉系の〈学習院〉に「あそうきの宮」の名が出ている。その名が〈京大2〉の本文では父の名となっており、〈慶應〉では父の別名のごとく記されているが、これは脱文や、伝写の間に生じた誤りと考えられ、〈京大2〉系の祖形にあっては、母を「あそうきの宮」としていたのであろう。

次に、記事の上では、太子の出国後、母后の死や父王の出家、三寺の建立を叙べる〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉の三本が明らかに同類をなし、〈刊本〉も、この系統を承けていることが認められる。

(3)せんしやう太子は三年三月の旅をして、あしゆく夫人の国に着く。

〈天文〉 しらぬ山ちのことなれは、人のかよひちさらになし、そのみちすからの御心のうち、さこそはおほしめされけん、すてにその日もくれ竹のよにふし、みねのきのねを御まくらとさためさせ給ひけり、たまくことふものとては、みねにさはたるさるのこゑ、むしやうのとらのなくこゑ、みゝにふるゝにことにうれへあり、せつのとりのね、くさむらことになくむしも、われをとふかとおほしくて、露もなみたもあらそひて、御たもともしほるはかりにそなりにける、その夜もやうくあけけれは、又立いてゝこひころも、しのひのみちにふみまよはせ給ひ、御こゝろのうちこそいたはしけれ、はくせきをふむ心ちして、せつせんのほら、しゝのあな、けうりうのつかのほら、けいほんせうのそとは、こけのみむして見えわかす、かやうになんしよおほくして、人さとまれにはんへりしかは、いよくたいしは、おんこゝろほそくそおほしめす、つなかぬ月日なりけれは、三ねん三月と申すには、さいしやうこくのたいりにそつかせ給ひける

〈武田〉 〈天文〉に較べると、著しく簡略で、三分の一位の本文しかないが、その中に、「人さとまれにして、なんところをゝし」や「つきひにせきもりすへされは」のように、〈天文〉の傍線B・Cに類似した語句が見られる。

〈天理〉 〈武田〉よりもさらに短い本文であるが、ここにも「しかもなん所にて、人里もまれなれは」の句がある。

〈京大1〉 長さは〈天文〉と同じ位であるが、その文章には、他の諸本と共通する部分がほとんどなく、

すせんのやまをこへすきて、二とせなかはと申すには、ろくやをんのつとりなる、しやくせんたんの木のもとに、やうくたよりつきたまふ、かのしやくせんたんと申は、ゑたはるかにひろにれり、あたりにきんくのはしあり、これやくわこの一ふつのわたりはしめたまいし、たまのはしとはこれやらん、むかひわたりてみたまへは、そのたけ五ちやうはかりなる、いしのほとは三ほんたつ、ひかんしふつの御さくなり、せんにんのこけのみち、いかゝわたらんまるきはし、こひめねんしゆのおきをこへ、しゝさうとうのほらをすき

のような独自の記事を有する。

〈京大2〉 これおはかくてさてをきぬ、いたわしやたいしは、はるあきおくらせたまひて、くものなみ、けむりのなみをしのき、ふもとのゆきをうちはらい、したい〳〵にめくらせたまふに、人さとまれなるところにては、みちにまよわせたまいけるとかや、さいしやうこくの大りをは、なみたと共にたち出て、きのふけふとはおもへとも、月日にせきもりすへされは、三年三月と申には、これや此ほとにきく、とうしやうこくのかたわらに、たとりそつかせたまひけり

〈慶應〉 さるほとに、いたはしやたいしは、行ゑもしらぬこいちに、たゝひとりすこ〳〵とまよはせ給ふ、ある時は、くものなみ、けふりのなみをしのき、ある時は、山をこへみねをわけ、人さとまれなる野辺をすき、露雪しもに御袖をしほりつゝ、まよはせ給ひけるとかや、さいしやうこくの大りを、いつしかなみたとゝも立出て、きのふけふとはおほしめせとも、月日にせきもりすゑされは、三年三月と申には、とうしやうこくにつかせ給ふか

〈京大2〉〈慶應〉の二本の間には、右のように断続的に同文の詞章が見られる。

〈学習院〉 右の二本より叙述がやや長く、太子の旅中の歌を入れたりしているが、終りの一節

人さとまれなるほとに、まよはせたまひけるとかや、たとり〳〵ったひ〳〵てゆくほとに、さいしやう国のみやこおは、なみたと共にたち出て、きのふけふとはおもへとも、月日にせきもりすゑされは、三年三月と申には、とうしやう国のかたはらに、まよひつかせたまひける

は、右の二本、とくに〈京大2〉に近い文である。しかし一方では、その前の個所に次の文がある。

せんのほらのしゝのあな、しゝけうわふのつかのほら、大ほんきやうのそとはゝ、きりにむせひてもじもなし

この一文は〈天文〉の傍線Aの部分と類似している。どちらも不明瞭なところのある文であるが、こういう類似があるのは、〈学習院〉と〈天文〉の間にも、何らかのつながりがあったのかもしれないと思わせる。

〈筑土〉 次のように、諸本中もっとも簡略な叙述ですましている。

はるははなをみ、秋は月をなかめて、やう〳〵いそかせ給ふほとに、とうしやう国のかたはらに、はにふのこやに御やとをめされ

右の文の中、傍線の句は〈学習院〉の

さるほとに太子は、はるは花のもとにたちよりたまひて、花おもなかめて日をくらし、なつはすゝしきかけをやとゝしてよをあかし、あきはさやけき月おなかめて、かつらおのこのかよひちは、いつくのそらにてさむろふそ、いつくもおなしくもひなるらんと、なかめあかしたまひけり

の文や、〈京大2〉の

はるあきおくらせたまひて

の句と、根を一つにしているのではないかとも思わせる。

〈刊本〉 他の諸本とは異なる独自の本文をもち、叙述がやや長い。

(4)太子、宿を借り、主に子細を物語る。

〈天文〉 たいりちかきところに御やとをからせたまひけるに、うちよりあるしたちいてゝ、いたはしくおもひまいらせ、さしきをこしらへて、たいしをゝきたてまつりけり、ふけ行よはのなくさみに、御ふへあそはしけれは、あるしのおんなこれをきゝて、これほとおもしろきふへのねは、いまたうけたまはり候はすと申けり、そのよもすてにあけしかは、屋とのあるし申やうは、御ありさまをみたてまつるに、たゝ人とは見えさせ給はす、いかさまこひゆへに、まよはせ給ふかと思ひはんへるなり、なにとかくさせ給ふそと、さまくにこしらへ申せは、たいし此よしきこしめし、いはぬにありさまを見しりたまふこそはつかしけれ、このうへはかたりはんへるへしとて、はしめより、とうしやうこくにて、ふにんの御事をほのかにきゝしより、心もそらにあくかれて、これまてたつねきたれると、こまくとかたり給ひけれは

〈武田〉 太子が宿で笛を吹くことが記されていないが、太子と宿の主との対話が〈天文〉よりくわしく、本文は長くなっている。その中には「一しゆのかけにやとるも、一がのなかれをくむことも、たしやうしゆゑんと申」の句があるが、これは〈京大2〉系の諸本にも出ている。

〈天理〉 太子の笛のことがなく、〈武田〉とほぼ同じ叙述内容である。「一しゆのかけ云々」の句があるほか、

いかさまにも、よふ有けなる人なりとおもひ、みめのよきにはかされて、一夜のやとをまいらせけり

の傍線の句は、〈武田〉にも、

御すかた、たゝ人にひとしからさるにや、はかされけんのように、類似の句が見出される。

〈京大1〉〈天文〉と大筋は変らないが、詞章に一致する所は少ない。中に、

ひたひのかみのちゝめるは、見ぬこひにあくかれ、まよはせたまふすかたと、見申たるはひかことか

のような他本にない文がある。また、

いはしとはおもへとも、日かけまつまのあさかほの、つゆときへなはつみふかし

は〈天理〉にのみ、

日をまつ程の露の身を、かくてきえなはつみふかゝるへし

という類句が見える。

〈京大2〉 そのよは、とあるところにて、はにふのこやにやとをとり、ふけゆくよわのつれくに、ふゑうちふきておわします、あるしはふへをうけたまはり、やさしのしゆきやうしやや、A此人はおやのふきやうをかうむりて、世をいとひたまふとんせいか、又わかきときのならひにて、B ぬしある人に心おかけ、こひぢにまよふしゆきやうしやか、とにかくにあんするに、なさけよしある人そとて、あひのしやうちにまちかくより、いかに

しゆきやうしやきこしめせ、御みをよく〳〵み申に、なへての人にておわせねは、何もくるしからす、せんそをなのらせたまへかし、一じゆのかけにやとり、一がのなかれをくむ事も、たしやうのきゑんとうけたまはり候成、何かわくるしかるへき、こよひ一やの御ときを、みつから申候はんとて、女はうことをひきけれは、あるしのおとこはびわをひき、ひわことふへにて、よもすからくわけんを申候へは、事のはさらにしきかたし、たいし此よし御らんして、あら〳〵やさしの女はうや、わかくてこひをしけるかや、みつからかこひをみしり、とむらひけるこそやさしけれ、今は何をかつゝむへき、かたりてこそとおほしめし、いかにあるしきこしめせ、われはこれ、さいしやうこくのしるし、くわつさうしやりんしやうわうの子に、せんしやうたいしとは、みつからか事にてはんへるなり、此国のあるし、せんしんわうのひめ宮に、あしやくふ人の御事お、かせのたよりにうけたまはり候てよりのち、みぬこひにあこかれ、これまてまよひきたれると、さひさんかたりたまへは

〈慶應〉〈京大2〉に近い本文である。主な相違を挙げれば、右の文の傍線個所が次のようになっている。

Aあるしの女房うけたまり　Bおよはぬこいに身をやつしけるか　Cやさしのあるしや、わかき時こいをして、我身におもひしりぬるかや、みつからかこいちにまよふすかたを、みしる事のやさしさよ　Dことこまかに

〈学習院〉〈慶應〉よりも〈京大2〉に近い。右の〈京大2〉と〈慶應〉との相違個所のうち、ABCは〈京大2〉の方と合致する（Dは単に「せんしあり」とある）。

〈刊本〉〈京大2〉系の三本とは、本文が離れている。太子の笛をきいて宿の主夫婦が感ずることや、Cのような文もない。類似する所としては、「はにふのこやにて、やどをこひたまふ」の「はにふのこや」の語ぐらいである。

〈筑土〉〈京大2〉系より総じて簡略であるが、「はにふのこやに御やとをめされ」とあるほか、主の女房が太子の笛を聞いて境遇を察することや、太子が「されはこそ、このねうほうはよくみはんへる物かな」と言ったとある所など、〈京大2〉系とかかわりのあることを見せている。

(5)太子、主に勧められて、姫宮への文を書く。

〈天文〉　あるしのにようはう申やう、いたはしき御事かな、みつからかむすめこそ、ことし十六になりはんへるを、こその秋のころより、うへわらはのためにとて、ふにんの御まへにつかへはんへるなり、なにかくるしかるへき、ふみをあそはしてたまはり候へ、まいらせて見候はんと申せは、たいしおうきに御よろこひありて、やかてすみすりなかしつゝふてをそめ、かくこそあそはしけれ

きみの御事を、ほのかにきゝしその日より、身はうきくさのねをたへて、まくらにたのみをかけしはや、ほしあひのそらをなかむれは、いとゝものうき秋の夜の、月はれなから、む

くらのやとをかりかねて、くさのまくらにたひねして、はい
きふのいほりもいまはなし
なんと、さま〳〵にあそはして、あるしにこれをたひにけり
〈武田〉 太子の文のことばを載せず、ただ「御ふみをかき給ふ」とだけある。主な詞章の相違としては、〈天文〉の傍線Aに当る部分が、
それほとのたいしを、いまゝてうちこめ給ひける御こゝろつよさ、御こゝろいたりてふかけれはすみやかるへし
とあり、またBの所は、
わかむすめにてはんへる物は、かのひめみやのちやうつかいにまいりてはんへれは
となっている。
〈天理〉 〈武田〉と同じように、太子の文の内容を載せない。またAの部分が、
かほと一大事の御事をつゝみ給ふ、御心のうちこそかなしけれ
とあるのも〈武田〉に近い。しかしBの個所は、
身つからかむすめ、ふ人の御としとおなし十六さいにて候か、こその秋のころよりも、かたしけなくもうへわらに、すこしも御そはをはなるゝ事も候はす
のように〈天文〉の方に類似する。
〈京大1〉 太子の話を聞いた宿の主は、
かのふにんと申は、くにのわうの御たまつさをさかへかへさせたまふ人なれは、おもひとゝまりたまふへし
と諫めるが、太子は押し返して、
さりなから大りにたよりのあるならは、たまつさをとゝけてえさせよとおほせ□けり
と頼んだとある。太子に文を書くことを勧める〈天文〉やその他の諸本と逆である。次に太子の文の詞も、他のどの本とも違う所が多いが、
ちしほにそむるくれないの、いろとりほかにこかるれと、人はなにとかゆふしくれ
の句は、次の〈京大2〉の傍線Cの句に通う所がある。また、
やまかたやまにをしおりて、あるしにこれをたひにけり
も〈京大2〉に近似している。
〈京大2〉 あるしこのよしうけたまわり、いかにたいしきこしめせ、その御事にて候はゝ、御心やすくおほしめせ、それをいかにと申に、わらわかむすめの十六になり候を、こそのはるのころよりも、大りゑめされまいらせて、うへのわらわのために、ふ人につかへ申なり、けにもさほとにおほしめし候はゝ、何かわしさひ候へき、御ふみをたまはり候へ、まいらせ申さんとそ申けり、たいし此よしきこしめし、なのめならす御よろこひありて、すみすりなかしふてをそめ、こうはひのたんしにうすやうをひきかさね、おほしめす事のはを、ふてもとゝろにかゝれけり
きみをよそよりきゝつたへ、しつ心なきこいとなり、ちしほにそめしくれなひの、色外にあらわれて、なに中〳〵にいわしろの、つたにたのみをかけはしや、身はこからしの山とな

り、いとゝものうきあきの月、なみたにくもるこゝちして、
さたかならさるふてのあと、さそやとおほしめし候へ
と、かきとゝめ、やまかたやうにおりて、あるしにこそはたひにける

〈慶應〉〈京大2〉と対比すると、語句に出入があるが、基本的には同系統の文である。

〈学習院〉前半は〈京大2〉とほぼ同文。主の娘の名をしよくちよとしている。夫人への恋文に関しては、次のようにある。

おぼしめすことのはお、さま〳〵あそはして、かくなん
こひはふと、おとにたにきけ、かねのこゑ、うちわすらるゝ、ときのまそなき

詞は省略し、歌を加えているが、この歌は「新古今集」巻八に出ている和泉式部の歌である。

〈刊本〉前半は〈京大2〉や〈慶應〉と近い文章であるが、手紙の詞は、これまた他のどの本とも異なる。

〈筑土〉太子の身の上話を聞いた主の女房のことばの中に、

されはこそ、よく〳〵見まいらせ候う物かな

という他本に見えない句がある。その他、叙述内容に変りはないが、恋文の詞をはじめ、文章は他本とかなり違っている。

(6)あしゆく夫人、太子の志に感じて返事をする。

〈天文〉あるし御ふみを給りて、やかてたいりにまいり、むすめにかくと申、御ふみとてそわたしける、むすめ文をふにんの御かたへ、しのひやかにまいらせけり、ふにんはこれを御らんして、いつくよりそ、おもひもよらぬことなりとて、かしこにすてをかせたまひけり、されとも、こま〳〵に申ける、そのゝち、たいしの御事をくわしく御たつねありて、さま〳〵の御ふみともを御らんして、ひめみやおほせありけるは、此人のふるさとをきけは、はる〳〵のとをきくにより、かやうにみつからをしのひて、きたらせ給ひける御こゝろのうち、まことにせつなれは、いかてかなさけなくは、むなしく返しまいらせんとおほしめして、返事をあそはしける、たいしこの返事を御らんして、御よろこひはかきりなし

〈武田〉この条は、左のごとく諸本中もっとも簡略である。

このたまつさをひめみやにまいらせたりけれは、たいしの御こゝろさしのわりなきをおほしめしやられて、やかて御返事あり

〈天理〉〈天文〉とほぼ同じ内容で、これも叙述が簡略になっている。

〈京大1〉〈天文〉の倍ぐらいの長さがあり、叙述内容も異なる。たとえば、太子と夫人との間の文のやりとりを次のように叙べる。

このたまつさのぬしならは、なにかはくるしかるへきと、おほしめさるゝことのはを、こま〳〵とあそはし、うわのそらなるかせなれと、くさはなひくとかきとゝめ、あふむのまひにたひにけり、たいしにこれをまいらする、もしいつはりのふみやらん、こゝろをしらんとおほしめし、ゆめとかひてをくらるゝ、うつゝとかひてかへさるゝ、かさねてたいしの御

かたより、あふとかひてをくらるゝ、ふにんの御かたより、
ゆふくれとあそはしたり
〈京大2〉 あるしはふみうけとりて、大りへいそきまいりて、むすめのかたへつたへける、むすめ御ふみたまはりて、ふ人へみせまいらせける、ひめみやこのよし御らんして、ふしきや、かゝる事をはいかなる人のつたへける、あらあさましの事やとて、ときならぬかほにもみちをちらしたまひて、とかく御返事もなかりける、さるほとに、そくちよははゝに此よしかたりけれは、あるしはいへにかへりて、たいしにかくと申ける、このよしたいしきこしめし、かさねてたまつさをあそはしける
これをひめみやきこしめせ、一しゆのかけにやとり、一かのなかれをくむ事も、此世ならんきゑんとこそ、うけたまはりて候に、一やをちきるたに五百しやうのゑんと、ひめみやはとうしやうこくの人なり、又みつからは才しやうこくの物なり、三ねん三つきのたひのみち、いかはかりとおほしめし、されはけに、みな人のかたりつたへることのはをは、いかはかりしろしめさすや、ふみの返事せぬ人は、七ひやくしやうしたなきものにむまるゝとこそ、うけたまはりて候へ、又みつからきみゆへに、なかるゝなみたのつもりては、こちくのふちとなるならは、しんによのたまのしつみはてなは、いつの世かはうかむへき、みはうすみひのふせひにて、下にこかるゝかいもなく、きへなん事をいかゝせん、みつからおもわん心のうちのくるしさを、さこそとおほしめし候へかし、ひめ宮
とこそかゝれたり、さるほとに、此ふみひめみやつく〳〵御らんして、やさしのたまつさや、ふてのたてとのしんしやうさよ、もんちのならひのいつくしさよ、なへての人のわさになし、たとへいかなる人なり共、なさけのみちはさこそあれ、かほとのふてのぬしならは、御返事もやとおほしめし、御ふみを何となくあそはして、御返事ある、たいしふみ御らんして、御よろこひはかきりなし、たとゑんかたもましまさす、あひみん事をいつかわと、まちさせたもふ久しさは、ねのひのまつのふたはにて、ちよをまつより久しくそおもひ
〈慶應〉 大体は〈京大2〉に近い本文であるが、部分的には異同が多い。とくに大きな違いとしては、夫人の太子への返事について、「御ことはなくてかくなん」として、次の歌を載せる。
かほとまて、こいちのやみに、まよひ道(なな)は、そらてる月を、袖にやとせよ
〈学習院〉 前二本と較べると〈京大2〉の方にやや近いが、〈慶應〉と一致する部分もある。太子の玉章の終りに、
ひさ方の、あめにしほるゝ、きみゆへに、月ひもらし(しらて)て、こひわたるかな
の歌を載せるが、この歌は「新古今」巻八の人麿の歌である。また、夫人の返歌もあるが、〈慶應〉の歌とは全く別の、
たのますや、人のこゝろの、花の色に、あたなるくもの、かゝるまよひは
というものである。
〈刊本〉 他本との違いが大きい。前三本のように太子の二度目

の文のことがなく、夫人に仕える宿の主の娘が、玉章の主の素姓を明かし、恋の情をさまざまに説いて、ついに夫人の返事を得るという筋になっている。その娘のことばの中に、

はなのころ、かゝらぬ山は、なかりけり、こゝろのはるは、かすみならねと

かやうに。むかしよりいまにいたるまて。かりそめの。そでのふりあはせも。たしやうのこえんとうけたまはる。いかなる人のわざなりとも。御らんせよ

という部分があるが、これは〈慶應〉や〈学習院〉の歌や文と、やや通じる所が見られる。

〈筑土〉〈武田〉と同様に、ごく簡略な叙述である。

(7)太子とあしゆく夫人、契りを結ぶ。

〈天文〉やかてたいし、しのひてひめみやのつほねへそいらせ給ひける、かくて御ちきりあさからすまし〳〵て、ゑんわうのふすまをかさね、たんきんのちきりをむすひ給ふ

〈武田〉たいしおほきによろこひたまひて、しのひてひめみやの御かたへいらせ給ひぬ、ゑんなふのふすまをかさね、たんきんのちきりをむすひて、御こゝろさしあさからす

右のように〈天文〉〈武田〉の二本は近似している。

〈天理〉せんしやうたいしは忍ひ〳〵にかよはせ給ひ、ゑんなうのふすまのしたには、ひよくのかたらひねんころ也、かくて三とせまてこそかよはせ給ひけり

これも傍線の句は〈天文〉〈武田〉に似通っており、近い関係がみられる。

〈京大1〉すてにその日もくれにけれは、あるしのをんなをしるへは、大りへいらせたまひけり、せんしやうたいしの御こゝろ、たとへんかたもましまさす、かのたいりと申は、四はうには四きをまなひつゝ、いさこにきんをくたきませ、にわにはるりをのへたれは、さなからみつのことくなり、たまのやうらくつらなって、かせにみたるゝそのおとをは、きんのしらへにことならす、此□とにたくへて、つまをとけたかきことのねの、きちやうのうちにきこゆるなり、たいし、やうてうぬきいたし、しはらくふかせたひけり、そのゝちきちやうをのけさせ、たまの御まにいりたまふ、かのひこほしのたなはたつめ、ゆくすゑかけしことのはの、かはすたもとのわひまくら、けふよあすよとひかすへて、甘日あまりになりにけり

右のように〈天文〉系とも、また後掲の〈京大2〉系とも異なる独自の本文である。あしゆく夫人の住む宮殿の状景を叙べる文は、他のどの本にも見られない。

〈京大2〉ひめみやもいわきならさる御こゝちにて、ふみみるみちもしけれは、いつしかとておほしめしわつらひて、しづかふせやのきうたくへ、しのひてうつらせたまひけり、かくてたいしとふ人とは、はなたのおひのふせやにて、うちとけちきらせたまひけり、天にすまはかんわうのとりの一つかい、ちにあらはとくたいのゑたをならふる木とならん、神とならはむすふのかみ、ほとけとならはあんせんみやうあふ、五とうりんね

のこなたより、六とう四しやうのあなたなる、ちくさの色はかわる共、我等が中はかわらしと、よわのしたひをうちとけて、ちきらせたまひて今ははや、御心やすくそ月日をおくりすきゆきけれは

〈慶應〉 基本的には〈京大2〉と変らないが、やや大きな違いとしては、傍線Aの部分が次のようになっている。

さるほとに姫宮は、やさしきことはにうつろひて

その他、〈京大2〉より少し簡略である。

〈学習院〉〈慶應〉よりも〈京大2〉に近い本文である。ただAの部分は、〈京大2〉とも〈慶應〉とも異なり、

さるほどにひめみや、むまるゝもそだつもしらぬ人ゆへに、おかさることはうつろひて

となっている。

〈刊本〉 これも〈京大2〉に準じた本文であるが、やや簡略で、たとえば傍線AやBの句がない。

〈筑士〉 さるほとにせんしやう大し、ささきにあひたてまつりて、あいねんふかくちきり給ふ

右のように、諸本中もっとも簡単な叙述である。

この条に関しては、〈天文〉〈武田〉〈天理〉と、〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉〈刊本〉とが、それぞれ一類をなし、〈京大1〉だけが特殊である。〈天文〉系は、太子が姫宮の宮殿へ忍び入ったとし、〈京大2〉系は、逆に姫宮が太子の宿に移ったと叙べているが、その点では〈京大1〉は〈天文〉系に属している。

(8)あしゆく夫人の父王は、このことを知って大いに怒り、二人を追放する。

〈天文〉 かくて日かすをかさねしかは、大わう此こときこしめして、おうきにいかり給ふ、われはこれこのくにのあるしなり、なんによにこといふもの、ひめみやひとりなり、いかならむ大こくのたいいちのわうしをこそ、むこにもとらんとおもふところに、それはさはなくして、おもひのほかなる世になしものゝ、こつしきしゆきやうしやに、ちかつくことこそやすからね、せんするところ、これほとなるふたう人をみやの内にをかむことは、かへりて天下のきゝう、まるかはちなるへし、かゝるものをは、たちまちにいのちを、うしなはんにはしかしとおほしめして、しさいにをこなはるへきよし、せんしをくたさる、しゐんといひて、たいこくのはうにて、なかくなかしはんへるものをは、きのかわにはのかたをかみつけて、いたすならひなれは、すなはちしゐんをいたされ

〈武田〉 〈天文〉とほぼ同文の所が多い。〈天文〉の「しゐん(歯印)」が「はいん」となっている。

〈天理〉 これも〈天文〉と同内容であるが、文章は簡略。「しゐん」のことが叙べられていない。

〈京大1〉 さるあひたた(ママ)、せんしんわう、このよしをきこしめし、けきりんありて、A きささきのみやにとひたまふ、ゆめ〳〵しろしめされす、さてはふにんかはからひか、B たつせのほらへなかせよとて、くわんにんにおほせつけ、しはんをくたしたまふ、かのしはんと申は、しやくせんたんのかわに、りうのはか

たをかみつけていたしたまふ、これすなはち、うこしなへとのせんしなり

右のように〈天文〉とは全く異なる文である。傍線Aの、母后に問うことは、他本になく、Bの「たつせのほら」は、後の〈京大2〉系の諸本に類似の名が出ている。

〈京大2〉 あくるはるにもなりしとき、いかなる人の申ける、みかと此よしきこしめし、丸がむこには、いかにもして大国のわうを取、よの人はむこにとらしとおもいしに、あまつさへ、よしなきしゆきやうしやに、ちかつく事こそやすからね、けふよりしてうちにはかなふまし、これよりひつじさるにあたりて、しんさんあり、七十五日にゆくみちなり、かの所へなかすへし、その所と申は、物うき事はかきりなし、かのところに、たつしよかほらと申て、とりたにもかよわぬしん山あり、ひとへにこらうやかんのすみかなり、こゝになかしすてよとて、しいの御はんをくたされ候、此国のならひとして、きのかわにはりふたをつけていだしぬれは、しいの御はんとなつけて、しゝ申事かなわす

〈慶應〉〈京大2〉とあまり変らないが、やや簡略になっている。傍線Cは「たんしよのほら」、Dは「はかたをつけて」とある。

〈学習院〉 これも〈京大2〉に近い。Aは「らつせのほら」とある。

〈刊本〉 他本にない増補記事が二つある。一つは、夫人の密通を怒った父王が、夫人をさんやうの刑（「くるま二れうよせ。その身をいたくまきつけ。りやうばうへはなち。身をぶんぶんに。さくを。さんやうと申なり。」とある）に処そうとしたが、武士のとりなしでそれは許したとあること、いま一つは、たつせのほらへ捨てられることになった夫人を、母后が呼び寄せて、別離を悲しむ場面が挿入されていることである。それを除くと、ほぼ〈京大2〉系に近い形になるが、父王の歯印のことは記していない。

〈筑土〉 つゝむとすれと、この事をみかときこしめし、抑我かむこになるへき物は、くにのうちにはおほへすと、ゆくへもしらぬ旅人にちきりをこむる事、なか〳〵申におよはぬ次第なり、いそきかの旅人とふ人を、ひとつ処はにうしなひたてまつれと、おほきにいからせたまいけり

右のように簡略な文で、他本と関係づける部分が見出せない。

(9)父王の命を受けた武士が、太子と夫人を輿に乗せ、都を遠く離れた深山へ連れてゆく。

〈天文〉 ひめみやと、たいしと、ひとつのろうこしにのせたてまつりて、みやこのひつしさる、地山のほらといふところに、うつしたてまつりぬ

〈武田〉〈天文〉と大同小異。姫宮と太子を連れて行った所は「たせんほう」となっている。

〈天理〉 ものゝふ、ちよくちやうにまかせ、玉の御こしをかゝせ、二人の御かたにまいり、他国へのきやうかうと、さま〳〵

たはかり申せは、たいし、ふ人、夢にもしろしめさすして、よろこひ、こしにめされけり、さいしやう国のたいりを、いまたよをこめて出給ふ、御こゝろの程こそはかなけれ、B ゐんちうさんのみねをこへ、あるときは野へをゆく、有時は川を過、すてに七十五日と申に、さいしやう国のひつしさる、たつせのほらといふ所に、御こしをかきすへ

傍線Aは他本には見えない独自の叙述である。また傍線Bは〈刊本〉と一致し、その前後の文も〈刊本〉に類似する。

〈京大1〉 くわんにんともうけたまはり、せんしなれはちからなく、ふにんの大いりへみたれいり、わうしとふ人とひきたてゝ、しらきのこしにのせ申、たつせのほらへといそきけり、三十五日と申すには、C 一ちうさんをこえすきて、ほらのほとりにつきたまふ

傍線Cが〈天理〉や〈刊本〉の「ゐんちうさん」と根を一つにするほかは、とくに他本と関係するところがない。

〈京大2〉 此御はんのいつるうへは、くわんにんともいそきまいりて、此よしかくと申ける、ひめ宮、たいしきこしめせ、それきみとみつからと、しのひちきりし事のはを、たれやのものか申けん、ちゝのたいしきこしめし、ふしきの事とのたまひて、しいの御はんをいたさるゝ、此国のならいにて、しいの御はんのいてゝ後、いかになけくとかなわねは、D はやく とくして、かへらせをはしませ、まことさそとおほしめされなは、むかいに人をたまはれ、たいしとそのたまひける、たいし此よしきこしめし、よしやそれとても、せんく の事とおほしめせ、きみにみつからはなれまいらせて、かひなきいのちなからへて、さいしやうこくゑかへりても、いくほとのしゆんしゆうを、おくりむかへ候へき、たとへせんねん万ねん、すきをくるとも、今すて申さんかなしさよ、のゝすへ山のおくまても、たとへいわうたつさわのおくなりとも、ひに入みつのそこにしつむ共、ふさいは二せのちきりとかや、うけたまはり候へは、なにしにはなれ申へきと、なみたをおさへのたまへは、ひめきみ此よしきこしめし、なのめならすによろこひたまひて、ものゝふをめして、おゝせけるやうは、いかにくわんにんとも、うけたまはり候へ、なんちらかしりたることく、此国のならひにて、きのかわをはかせて、わうはたかをあらはして、ものゝふにたひぬは、うしなふへきにさたまれると、かねてしりたる事なれは、いかになけくとかなふまし、とてものかれぬものゆへに、たまの御こしをいらせよ、くわん人ともとおゝせあり、ものゝふこれをうけたまはり、たまの御こしをまいらせ、たいしも、りうこしにめされて、七せんよきにしゆこせられ、御こしをはやめて、たいしんくきやう天上人、みなく たもとをしられたまへは、しちやう、くわん人以下のぶしまても、みなく たもとをしをりけり、E けにはいしよのならひにて、ふる雨はしやちくのことくにて、ふく風いさこをあけけれ共、はいしよのたひのならいにて、御こしをやすみとゝむる事もなし、さしていそかぬみちなれは、ゆめにみちゆくこゝちして、とうしやうこくをたちいて、きのふけふとはおもへとも、七十五日と

申には、さしも物うき、たつしよのほらにそつきたまふ
〈慶應〉 ここも〈京大2〉と大筋は同文である。〈京大2〉の傍線Eは、他の系統の本には見えない文であるが、〈慶應〉もこれを備えている。
〈学習院〉 これも〈京大2〉と大略は同じである。傍線Eの個所も、
　けにやはいしよのならひにて、御こしをやすむることもなし
と、簡略化された文で残っている。〈京大2〉や〈慶應〉と特に異なる叙述が見られるのは、傍線Dの個所である。〈学習院〉は、
　たいしは、いそぎさいしやう国にかへりたまひて、水から是にてむなしく成たるときこしめさは、あととふらひてたひたまへと、なく〳〵おほせ有しかは
とある。〈京大2〉のように、太子に国へ帰って、志があれば迎えを賜われというのは、姫宮の処刑が目前に迫っているこの場面では不適当なことばである。〈学習院〉のように、跡の弔いを頼むという方が良い。
〈刊本〉〈京大2〉系統と同様に、引立の官人を前にしての姫宮と太子との言葉のやりとりがあるが、文章は簡略になっている。そして、内裏から刑場へ赴く所の叙述は、前記のように〈天理〉と一致している。とくに、
　さいじやうこくのみやこを。いまだよぶかに出たまふ
とあるが、〈刊本〉は〈京大2〉系統の諸本と同じく、太子の国を西城国、姫宮の国を東城国としていたのに、ここで国名まで〈天理〉と同じになっているのが不審である。この後も〈刊本〉は〈天理〉と一致する個所を随所に有しているので、両者はかなり近い関係にある本であったことが推測される。
〈筑土〉 大王の命を受けた武士が姫宮の許に輿を寄せた時に、
　はわきさきと、ねうほうたち、いまをかきりのことなれは、御なこりをしさのやるかたなさに、なけきかなしみ給ふ事かきりなし
という文がある。これは前条における〈刊本〉の、母后が姫宮との別離を悲しむ記事と関連があろう。また、姫宮が太子に向って、
　かゝるうきめにあふ事も、ひとへにきみのゆへそかし、きみにひかれまいらせすとは、なにしにかくはあるへき
と、恨み言を述べたとある。この記事は他本にはない。
(10)山中に送られた太子と姫宮は、武士の情で命を助けられる。
〈天文〉 ふかさ七しやくにあなをほりて、つるきをさかさまにとりたてゝ、そのうへにおとしたてまつらむとしけれは、たいし、ものゝふにむかひて、御てをあはせておほせありけるは、そも〳〵なんちらうけたまはれ、われはこれ、とうしやうこくのあるし、月さうてんりんしやうわうの御こ、せんしやうたいしといふものなり、くにをおさめんかために、ささきをもとむるに、わかくにのうちにそのかたちなきあひた、かくはかりとをきくにゝきたりし、そのみちのほと三年三月をへたり、その

ゝち、ちゝはゝの恋しきこと、中〳〵申はかりなきなり、かたく〳〵みつから二人をはせつかいしたるよしを、かへりてきみにそうもん申へし、かくはかり山ふかく、さととをきところへいりぬれは、いかてかきみも、いきたりとはしろしめさるへき、しかるへくは、おほやけのわたくしをもつて、このたひのいのちをたすけよ、ほんこくにかへりなは、かならすこのおんをほうすへしと、のたまへは、ものゝふいはきならねは、をの〳〵なみたをなかしつゝ、けに〳〵さる御事のましますそや

おもひには、いかなるはなの、さくやらん、みになりてこそ、おもひしらるれ

をしはかりまいらせて、たいしをたすけたてまつりたるとかによりて、さためてしさいか又はるさいにこそ、をこなはせたまはんすらむ、よし〳〵それこそわか身のほんゐなれ、人をたすけたてまつりて、いのちをうしなはんこと、露ちりほともおしからすとて、御いのちをたすけたてまつりけり、ものゝふみやこにかへり、せんしのことくつかまつり候よし、そうもん申せは、大わうきこしめし、りんけんあせのことし、いてゝ二たひかへらすとは申せとも、おんこうくわいの御きしよく見え給ひて、さうかんに御なみたをうかめさせたまひけり

〈武田〉 前半の部分は〈天文〉と同文に近いほど類似している。ただ〈天文〉の傍線Aの個所が

くになかに、しかるへききさきたち、なかりしあひた

となっているが、これも「そのかたち」と「しかるへききさきたち」との間に通うところがある。次に傍線Bの句はなく、このあたりから文章は〈天文〉と離れてくる。「おもひには……」の和歌もない。しかし、Bの句や和歌は、他本には見えない〈天文〉独自のものである。なお、この和歌は「平治物語」に後白河院の作として出ているもので、謡曲「生贄」や、「曾我物語」の大石寺本・本門寺本にも引かれている。これらは〈天文〉独自の増補かもしれない。

〈天理〉 ふかくあなをほり、うつみ申さんとさま〳〵たんかうす、二人の御まへにまいり、御さいこなりと申せは、たいしもふ人も、これは夢かうつゝか、何妻のとかやらんとのたまへは、ものゝふ申やう、きみは是十せんの位にてましますに、よしなきしゆきやうしやと契りをこめさせ給ふゆへなりと申せは、たいしきこしめし、我はとうしやうのあるし、くわつさうてんわうの子に、せんしやうたいしとは我事也、あしゆくふ人の御事を風のたよりにほのかにきゝて、はる〳〵恋しさにまよひ来り、契りをこめ申也、此よしちゝ大王しろしめさすや、御なさけなやと歎き給ふ、さらはすて給へ、いわ木はかりの山のおく、誰かはしらせ申へき、なんちとものなさけにたすけよと仰せけれは、心あるものゝふ申けるは、身にあたりたるかたきにて御ましまさす、りんけんと申なから、てんめいもいかゝなれはたすけ申さむと、二人をかの山の中にすてまいらせ、むなしきこしをかきかへりけれは、つらきなからもあとをしたい、なきかなしみ給ふ事かきりなし、心つよきものゝふとも、かへりみ申、涙をそなかしける、さてものゝふ大りにまいり、ちよ

くちやうにまかせ、うしなひ申候とそうもんすれは、一たんは御はらのたつまゝに、せんしをはなし給へれとも、さてはまことにうしなゐたるかと、ふしししつみなけき給ふ

右の傍線C・Eのように〈天文〉〈武田〉にはない叙述を含む。このうちEに類する叙述は〈京大2〉系に見られる。また、D・Fは、〈天文〉〈武田〉にも同趣旨の叙述があるが、〈天理〉の文は〈刊本〉とほとんど一致している。

〈京大1〉 叙述は〈天文〉〈武田〉〈天理〉などよりも、やや簡略である。官人に命乞いをするのが、太子でなく姫宮になっているのは、〈京大2〉系に類する。官人が大王に二人を誅した由を奏聞する所の文は〈天文〉に近い。

〈京大2〉 その時、ひやつくわんとも、かねてよをいの事なれは、ふかさ一ちやう五しやくに、しゝあなをこして、そこにつるきをうへならへ、たいしとふ人をおとし入まいらせて、かいし候はんとて、あらけなき物ゝふ共、われおとらしとひしめきける、いたわしやひめみやは、御こしのうちを出たまひて、こほるゝ御なみたをおしとゝめ、くわん人のたもとにすかり、いかにものゝふうけたまはれ、あさましの事共や、こは何と成ゆくありさまそや、しかるへくはものゝふとも、われらをたすけたまへかし、されはとて此道か五日十日のみちならす、(山海を慶)三かい(G)をへたてゝほととおし、たれやの物かまいりて、しさいをかくと申へき、なんちらかはからひにて、此野にすておきて、みな〳〵かへれとたまへは、ものゝふともの其中に、くわしくうけたまはり候て、あらかたしけなや、きみは三たいさうおんなり、われらはふたいのふるきもの、いかてかかいし申へき、わかきみとこそ申ける、ひめ宮きこしめして、御よろこひはかきりなし、ものゝふ申けるやうは、われらもこれにて、とにもかくにもならはやとおもひまいらせ候そ、御かとのせんしをそれ成、わうくうへかへり候はん、とは申せ共、ういむしやうはこれにあり、此国のならひにて、せつかいのかたなとて、三かたなきるまねを申なり、さてそのゝち、くわうけつとなつて、人(なつけて慶)(H)うすまねを申なり、さて又くわん人共、御まへにかしこまり、いとま申てわかきみとて、むなしき御こしをいそかせて、わうくうへかへりけるほとに、たいしもひめ宮も、今のわかれを御おもひは、たとゑんかたもなかりけり、さるほとに物ゝふは、(I)たいしとひめ宮に、とりにて御なけれとも、四てうのわかれを申ける

〈慶應〉〈京大2〉とほぼ同じような本文である。終りの傍線Iの一文だけがない。また、傍線Hの所は

くわうけんとなつけて、三四度うちたてまつり

とある。この「くわうけつ」あるいは「くわうけん」という語は、その語義をいまだ考え得ないが、次の〈学習院〉にも、

くわうけつとなつけて、三と四とうちたてまつり

とあり、これら三本のみに共通して出てくる語である。

〈学習院〉 これも〈京大2〉にごく近い本文である。ただIの個所が、

さるほとに、つわ物はこほにてはなけれ共、こうきよの思お

なして行、ふにんはとりにあらねとも、してうのわかれとおぼしめし、とゞまらせ給ひけり

この文は「保元物語」金刀比羅本「為義降参事」に「鳥にあらざれども四鳥の別を悲み、魚にあらざれども洪(鉤カ)魚の思ひに沈む」とあるのと同趣旨である。〈京大2〉に「四てうのわかれ」だけが出ているのは、〈学習院〉の簡略化のごとくにも見えるが、この句は別離の悲しみを形容する慣用句であったと思われ、四鳥の別れだけの例の方が多い。

〈刊本〉全体に叙述が簡略である。穴を掘って太子と姫宮を落し入れるという処刑の方法も叙べられていない。この条の本文中にも、〈天理〉の傍線DとFの文が、ほとんど同文で使われている。なお、姫宮と二人山中に残された太子が次の歌をよんだとある。

君ならは、とらふすのへも、つらからし、ひとりぬるこそ、物うかりけり

〈天文〉のこの条にも和歌が出てくるが、よみ手も、歌詞も全く異なる。直接の関係はなく、別個に増補されたものであろう。また、〈京大2〉の傍線Gに近似した句が次のように使われている。

たとへたすけ。申たりとても。五日や。十日のみちならばこそ。たれがたすけ申たると。大わうに申べきとて。

〈刊本〉では、武士のことばの中に使われているが、〈京大2〉系統の本文との間にも、何らかのつながりのあることが考えられる。

〈筑士〉かくて、とうしやうこくのみやこをたつて、七十五日にあゆみつゝ、こらうやかんもすまぬ、たつせのほらといふしんさんに、たゝ二人すてをきまいらせて、物のふともは、おのく〳〵とうちやう国へそかへる(ママ)ける

右のように、最も簡単な叙述である。

(11)太子と姫宮、山中で暮すうち、二人の王子をもうける。

〈天文〉かくて二人の人々はA さとにいて給ひて、つたをあそはされて、しんみやうをつなかせたまふ、とし月ををくらせ給ひけるところに、ひめみやなやま せ給ふことあり、たいし、いかなることそやとおほしめすところに、ひきかへて御くわいにんにてそをはします、十月と申には御さんのひもをとかせ給ひける、うつくしきなんしにてそわたらせたまふ、たいしはつたにいて給ひて、かへらせ給ふ、御よろこひのありさまを御らんして、これかやよろこひの中のなけきとは、いまこそおもひしられたり、此あひたは二人ありしたにも、てうせきすきかねしに、又わうしさへうちそへていてき給へは、こはなにとなるへきことそや、よし〳〵ともにこつしきをこそせめとて、こゑもおしますなかせたまふ、かくてあるへきことならねは、又たいしさとにいて給ひて、こつしきをあそはされけり、B みのゝきれ、こものきれなとをもらひて、やまへかへらせ給ふ、これはなにのようやらむとありけれは、ふたりの御ひと、此三とせ御きぬをめしかへられさりしあひた、御身にまつゐたまはんかためなり、かくて御なをは、せんくわうたいしと御なつけあり、しか

ふしてのち、又たいしいてき給ふ、御名をは、せんしんたいしとなつけありけり

〈武田〉〈天文〉とほぼ似通った内容を叙べているが、文章には類似する所が少ない。たとえば〈天文〉の傍線Aに当る所は、

しんさんのなかにたちめくり、まつかねをまくらとし、しきもならはぬこけむしろ、うちふしなけかせ給へとも、月よりほかにかけさゝす、かせよりほかにおとつれす、やまかけに月ひをおくり給ひけるほとに

となっている。しかし、右の文に続いて姫宮の懐妊のことを叙べた後に、

ひころはともにちさとをまわり、ものをこひ、御いのちをつかせたまひけるか、たてらぬ御みになりぬれは、ひめみやのきやうふもかなわすして、たいし一人さとにいて、そてをひろけてものをこひ、ひめみやをはこくみ、ともにいのちをたすかりたまふ

という文がある。この文が〈天文〉のAに関連するのであろう。そのほか、太子と姫宮の着る物のことを叙べているのも、〈天文〉との間に共通しており、この二本の本文が源を一つにすることが窺われる。

〈天理〉 さても二人の御かたは、たかき山にいわ木ならぬ御身なれは、ろとうに出、つたをそし給ひける、こいてかへらせ給ふときは、しはのけふりをたて給ふ、むなしくかへらせ給ふときは、草の庵もさひしくて、たもとのかはくひまもなし、いたはしや、みやこにまします時の玉のうてなに、にしきのふすまかさね給ふに、今はこけのむしろにあかしくらさせ給ふ、折ふし山郭公をとつれけるを、涙なからにかく計

あし引の、みやまかくれ、ほとゝきす、人にしられぬ、音をのみなく

と、かやうに詠し、いよ〳〵御歎きこそまさりけれ、さても、れうらきんしうの御たもとも、あめ露にくちはてゝ、雪にねたまれし御はたへも、あらはに成ぬれは、ふにんはならのはかしはを、くすかつらにてぬいあつめ、御身をかくさせ給ひけり、たいし、つたに出させ給て、みのゝきれ、こものきれをひろいあつめ、はたへをかくし給けり、春は露にこめられ、夏はあつさにてらされ、秋はきりにうちしほれ、冬はこほりにとちられ、しよくふつも心にまかせぬ事なれは、いつしかうつくしかりし御いろもかはりはて、あさましや御けしきも、みるへきやうもなかりけり、しかれとも、ふさいのこゝ地のならひにて、たゝならぬ御すかたにならせ給ひ、日ころはふたりつれて、つたに出させ給ひしか、かゝるすかたになり給ひ候へは、ふ人、さもあほやきのいとはつかしけなるふせひにて、御さんのひほをとき給ふ、たいし御らんして、まつかきくらし、なみたをなかさせ給ひ、あさましの御ありさまや、都にて生れ給はゝ、たとひふけうをかうむるとも、このありさまはよしあらし、われ〳〵か身をさへ、をき所なくおもふに、今より後をいかゝせんと歎き給ふ、さて有へきにあらされは、はるかのたにゝくたり、水をくみ、あたりのしはをかきあつめ、うふゆをひかせ申、

やかて御なを、せんくわうたいしとつけたまふ、一年あって、又わうしいてき、御名をせんしん太子と申けり

右の〈天理〉の文には、他の諸本との複雑な関係が見られる。まず傍線Cの部分は〈天文〉のAの文に相当する。〈天理〉の方が叙述がくわしくなっているが、「頭陀」という語が共通して使われている点が注意される。また傍線Eの句も〈天文〉のBと一致する。次にDの一文は、後掲の〈京大2〉系の本文に、類似の形が出てくる。ただ、この場合は趣旨は同じであるが、表現には異なる所が多いので、両者をすぐに結びつけるには問題があろう。終りの方のFの文は〈刊本〉にほとんど同文の個所がある。この方は〈天理〉が〈刊本〉と直接交渉をもつことを明らかに示している。なお、CとDの中間の、和歌を含む部分は〈天理〉独自の文である。この場面に和歌を載せる本には〈学習院〉と〈刊本〉とがあるが、和歌の詞は各本別々である。

〈京大1〉　孤立した本文であるが、わずかに、

たこ(いか)しはやう(まか)へわけいりて、このみをひろひ、つま木とり、くさのいほりへはこひつゝ、ふにんはたにゝおりくたり、みつをむすひ、ねせりつみ

という文が〈刊本〉や〈筑土〉と共通する。

〈京大2〉たいしとひめみやは、かの所にはなされて、ひんふ(G)くふたつのならいにて、かなしき事をおほしめし、よをあかしひをくらし、月日をおくりたまひしは、何にたとゑんかたもなし、めしたる御ころもは、露霜ゆきにくちはてゝ、かたを取てすそにさけ、すそをむすひてかたにかけ、よろつかわらぬしき(H)なれは、かみのふすまをめされて、はたへをかくすはかりなり、今のわれらかありさまを、何にたとへんかたもなし、かくてあるへきにあらされは、あたりのくさをむすひよせ、これを大りとなつけ、このはをござにしきたまひ、このは(木の根を慶学)を御まくらとしたまひ、あけくれすませたまひしに、なんによのいもせのならひにて、いたわしやひめみやは、わうしをはらみたまひて十月と申には、御さんのひほをときたまふ、とりあけ、これをみたまへは、たまをのへたることくなる、わうしにてそおわします、そのときひめみやは、さんこの御むねに、かきなつけたまふ事そあわれなる、くわほうなのわうしやな、とうしやうこくの大りにて、たんしやうなりたらは、さこそよつきのわうしとて、もてなしかしつき申へきに、かゝる物うき所にてむまれさせたまひたる、くわほうのほとこそたなけれとて、なみたをなかしのたまへとも、かいさらになかりける、さてあるへに(ママ)あらされは、御なをつけたてまつり、せんくわう殿と申けり、たねまきそめしなてしこの、はなのゆかりのあわれさは、又いくほともなくして、わうし一人出きたまふ、おなしく御なをつけたてまつり、せんしん殿とそ申ける

〈慶應〉〈学習院〉二本ともに〈京大2〉ときわめて近い本文である。とくに傍線Kのような句を共有していることから見て、三本は親近な関係にあることが明らかであるが、一方、細部には次のような異同が見られる。

G〈慶應〉うゐてんへんの世のならひとて、うきなからこい(ママ)

をあかし　〈学習院〉ひんふくふたつの、ことはりのかなし
さよとおほしめし
H〈慶應〉はたゐをもかくさせ給ふたよりもなければ　〈学習院〉とかくいとなみたまへどもかなはねは
I〈慶應〉いまの我〳〵かありさまを、物によく〳〵たとふれは、七けんといひしもの、さいちよにわかれて、世をいといとんせいして、もゝむすひといわれけるも、いまこそおもひしられける　〈学習院〉今のわかみのありさまを、ものによく〳〵たとふれは、七けんといゝしもの、なれしさひちよにわかれてよをいとひ、もゝむすびといゝけるも、今こそおもひしられたりとて
J〈慶應〉の給ふ事こそあわれなれ　〈学習院〉さんこのむねにかきさつけ、のたまいしことそあはれなり
Gは〈京大2〉と〈学習院〉とが一致し〈慶應〉のみが異なる。おそらく「貧福二つの習ひ」といった句が耳馴れないので、「有為転変の習ひ」と言い変えたのではないか。Hは三本ともに異なる。前後の続きからすれば、〈学習院〉が最もわかりよいが、〈京大2〉の「よろつかわらぬしきなれは」は、意味が不明瞭であるだけに、これには何かもとがあったようにも思われる。〈慶應〉は最も拙劣な文で、ともかく意味を通そうとした感がある。Iは、同文の〈慶應〉と〈学習院〉がもとで、〈京大2〉はそれを省略したのではなかろうか。なお〈学習院〉はIの文に続いて、
ふるさとを、わかれしあとを、かそふれは、やとせになりぬ、有明の月
という和歌を載せる。これは「新古今集」哀傷に出ている歌である。Jは、三本を較べると、「さんこの御むねにかきなつけ、のたまふ事そあはれなる」が原態に近い文であったと思われる。三本それぞれに誤脱を生じていて、互に補いあう関係にある個所は随所に見られる。
〈刊本〉前記のごとく〈天理〉のFと同文の個所を含む。また同じく〈天理〉のDと類似する
とうじやうこくにてめされし。りやうらきんせうの。いしやうも。みねのこすゑ。いはかどにかゝりて。やふれ。御はだへもかくれがたし
という文もある。これに類する文は〈京大2〉系の三本にも見られる。そのほか、
たいしはみねに。のぼり給ひて。つま木を。とりたまへば。ぶにんは。たゝに。くたり給ひて。せりをつみ。木のは。きのかはにて。みづをむすびあげ。かやうにあさましき。あさ夕の御すまゐ。いつならはせ給ふらん。
という一文は〈京大1〉や〈筑土〉に通じる部分である。このように、他本との複雑な関係を見せるが、さらに姫宮の歌として、
いにしへは、をとにもきかぬ、山さとに、せりやこのみを、とるそかなしき
の一首を載せる。〈天理〉と〈学習院〉も和歌を載せるが、三本ともに全く別の歌であり、各本それぞれに増補したのかもし

れない。

〈筑土〉(9)の条に続いて、ここでも姫宮が太子に恨みごとを述べる次の文がある。

いたはしや、大しにむかいたてまつりておほせけるは、われとうちやう国にあるならは、くきやう大しんにいにうせられ、さこそはゆゝ敷あるへきに、きみもさいしやう国におはしまさは、まつり事をもすゝめ、くはんけん、くきやうにかしつかれ給ふへきに、よしなき恋に身をつくし、きゝもおよはぬうきすまい、なにとしてかは露の命の、なからふへきとありけれは

これは〈筑土〉だけに見られる独自の記事である。その他、前記のごとく〈刊本〉および〈京大1〉と共通する叙述を含む。

以上の十一条は、〈天文〉と〈京大2〉の二本については本文全文を掲げ、それを基準に諸本の比較を行なってきたが、以下は、諸本とも必要個所のみの引用にとどめる。

(12)太子、夫人と二人の王子を山中に残して本国へ帰る。

〈天文〉 太子は王子たちの将来を考え、

かやうにわうしたちあまたましませは、世にたゝせはやとおもふなり、それにつけても、かのものともをふるさとへつれて、ちゝはゝにもたいめん申させて、世にもあらせたく候

と、夫人に告げる。夫人は、

A われらいちこのあひたは、とてもかくてもありなん、たゝわうしたちのすゑの世をいかゝせんと、おもひわつらひ候つるところに、よくもおもひよらせ給ひたるにこそ

と喜ぶものの、往復の道の遠さを思い、太子との別れを悲しむ。しかしまた、

B つら〳〵ものをあんするに、あふもゆめ、わかるゝもゆめ、しやうする物はしするならひあり、このあひしうのなすところによりて、いまにるてんをなすほんふたり、此ことをおもふときは、さのみになにをかかなしむへし

と思い切って、太子を送り出す。

〈武田〉も〈天文〉と叙述の大筋は同じであるが、文章に飛躍があって、夫人の気持が正確に表現されていない。夫人が最後に思い切る〈天文〉のBの個所も、

うちかへし、よく〳〵おもひたまふに、ひめみやおほせられけるは、わうくうへかへらんとおほしめすことも、こをおもふおやのめくらし、わうしをはたいしとおもひ給ふに、よにあらせんとくわたてたまふに、ひさしくすてられたてまつらんことをなけきて、とゝめ申さんこと、こをおもふおやにはかわりたり

とあって、〈天文〉の仏教的な諦めとは別の心情を叙べている。

〈武田〉は、前の〈天文〉のAの個所にも、

われらかいちこはかくてもありぬへし、わうしたちのすへた(ゝ)いかゝと、こゝろくるしく候へは云々

という夫人のことばがあり、Bは同じことの繰り返しになっている。全体に〈天文〉の方が整った叙述である。

〈天理〉太子の申し出を聞いた夫人は、まず太子との別れを悲しんで、王子と共に供を願う。しかし太子に、

けに御ことはりにて候へとも、いかてひとあしも御あゆみ候へき、いかやうにも御やしなひ候て、御かんにん候へ

と諫められ、夫人も、

たゝ身つからをすてたまふにこそはあらめ、子ともをよにたてんとの御事、めてたく候

と、涙を押えて太子に暇を参らせたというように、〈天文〉〈武田〉よりも、夫人の悲しみの気持の方が強調されている。なお、この条は、〈天理〉と〈刊本〉と同文の所が多い。ただ〈刊本〉は、太子との別れを悲しむ夫人のことばの中に、

うたてやな。たれゆへかゝる。物うき所へなかされて。こゝやかしこにたゝずみ。あかしくらし。物うきおもひを。する御事も。ひとへに御身ゆへそかし。

という恨みごとが入っている。これは〈京大2〉系の三本と類似する。

〈京大2〉〈学習院〉〈慶應〉の三本は、太子が暇を乞うと、夫人はあまりのことにことばもなく、やがて、

たいしきこしめせ、かほとに物うき所へきて、ちゝはゝのわかれと申、あけくれものをおもふも、たれゆへそとおほしめす、きみゆへの事そかし、されはとて此みちか五日十日のみちにてもなし、三かいをへたてゝ、あなたへも三ねん三月なり、こなたへも三年三月なり、六年六月のあひたをは、いかはかりとおほしめす、われらか露のいのちをは、きのふとわれてけふかなし、又あすをもしらぬみなれは、たとへりうたつみねのおくなりとも、くそくせさせたまへ

と嘆くが、太子は心強く振り切って出ようとする。夫人はなおも袂にすがって、

うらめしのありさまや、おもふ中をはなるゝは、よれあふふちをきることく、すゝしのおいのなかきれて、いつあふへきとたのみなし、いけみつのすへもとをらぬ物うへに、なこりををしむかなしさよ、あたなたつたのこうようも、ふきこすみねのあらしにちりけるかや、わらわがなかもちりはてゝ、つかわぬをしのひとりねを、わか身は何となるさわの、あしまにやとる月かけの、あるかなきかのふせをは、何となれとかおほしめすらん、こはいかゝせん

と、かきくどき訴えたが、太子の心は変らず、国へと急いだ。右は〈京大2〉の本文であるが、〈学習院〉も〈慶應〉も大筋は変らない。このように、〈京大2〉系の三本は、もっぱら取り残される夫人の嘆きだけを強調する。ただ〈慶應〉だけは、右の二つの文の間に、

さて又ひめみやは、なみたをゝさへてのたまひけるは、かやうに申とゝめても、みつからはともならはなれ、二人のわうしたちの世にもたゝせたまはゝ、御かへりましませ、なこりをしくは候へともと、なみたをなかし給へは、たいしも御なみたにむせひ給いけれとも、おもひきらせ給いつゝ

という文が入っている。王子たちの将来のために太子の帰国を承知するというこの一文は、〈天文〉系や〈天理〉〈刊本〉など、

〈京大2〉系以外の諸本に共通するが、〈京大2〉系の〈慶應〉にあっては、その後に続く前掲の夫人のことばと矛盾する所がある。〈慶應〉には他本との混合があったのかもしれない。なお〈京大2〉系三本には、太子が旅立った後、夫人と二人の王子が太子の消えゆく姿を見送り、洞の中で共に泣き伏したという記事がある。これも別離の悲哀を強調するのに役立っているが、この記事は〈筑士〉にごく簡略な形で含まれているだけで、〈京大2〉系三本に特徴的な部分である。

〈京大1〉と〈筑士〉は全体に簡略で、かつ孤立した本文を有する。共に内容は〈京大2〉系の方に近い。〈筑士〉には、別れに際して太子が形見の笛を残すという独自の記事が含まれている。

以上のごとく、この条は〈天文〉〈武田〉と〈京大2〉系との間には、叙述内容にかなり際立った相違が見られ、〈天理〉〈刊本〉がその中間的な形を示している。

(13)太子、本国に帰り着き、父母あるいは父と対面する。

〈天文〉は、東城国に着いた太子は国の様子を尋ねると、父王と母后は二谷くわうりん寺に籠って太子の無事を祈念していると聞き、すぐに寺へ急いで父母との対面を遂げたとある。

〈武田〉は、この条は〈天文〉と叙述内容に違う所がある。東城国の者が太子に語ることばの中に、太子出奔の後、王宮は「とらふすのへにあれはてゝ、かりにもわういあるへからす」とあるが、王宮が荒れ果てたことを叙べる文は、〈天文〉以外のすべての本にあり、とくに〈京大2〉系の本には強調的に叙べられている。また〈武田〉は、父母がくわうりん寺にあると聞いた太子は、人を遣して王宮へ迎えたとしている。これも、他の諸本はすべて〈武田〉と同じである。そのほか、父の大王が太子の行方を尋ねて諸国を巡り歩いたと言っているが、これは他本には見えない記事である。

〈天理〉他本と相違する所が多い。太子が本国へ帰る道すがらを、

あしにまかせて行給ふは、(ママ)いわねのとこのぬしなきをたのみ、山路のこけにそてをかたしき、くたるたにくは、しようけいになくふくろうのこゑをきゝ、野へをわくれは、らんきくのはなにきつねのこゑをきゝ、明ぬ暮ぬといそかせたまふほとに、とうしやう国にそ付給ふ

と叙べる文が〈刊本〉に全く同文で出ているが、その後は〈刊本〉とも離れている。東城国の内裏の荒廃した様を、

むかしに今はかはりはて、ひやうたんしはくむなしく、くさかんゑんかちまたにしけく、れいてうふかくとさし、あめけんかとおそおうるありさま

と叙述するのも他本と異なる本書独自の文章である。ただ、太子の父王の隠栖した寺として「くわうゑん寺」の名を出し、三寺建立のことを記さないのは〈天文〉〈武田〉に類する。

〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉は、この条の叙述が非常にくわしい。三本それぞれに本文細部の出入異同はあるが、〈京大2〉によって示すと、まず内裏の荒廃した様を、

ついしはあれとおゝいもなし、かわらものきもくちはてゝ、しんせきたへてくさふかし、こゝろをすましみたまへは、しのふましりのわすれくさ、わかみに思ひあわせたり、はう〳〵としたるありさま

と叙べ、あきれた太子が紫宸殿に昇って見まわしていると、年老いた昔の大臣が現れ、太子を見て、

天上のからにしきは、くたひて天上にましわらすとこそ、うけたまはりて候へ

と言って、賤しい沙門の身で昇殿するとは何事と、太子を打ちすえる。太子が、我こそいにしえのせんしやう太子と名のり、父母の行方を尋ねると、大臣は杖を投げ棄てて太子を礼し、母后は嘆きのあまりに空しくなり、父王は位を捨てて、東の方に見える林の中に、さいりん寺、ちくりん寺、かうりん寺という三寺を建て、法王となって住まれていると語る。太子は大臣に命じて法王を迎える。法王は太子に見参し、玉の冠と国の指図を渡し、位を太子に譲った。その後、太子は母の孝養のために堂塔を建て、大河に舟を浮かべ、小河に橋をかけなどして善根を積んだ。

〈天文〉〈武田〉〈天理〉などと大きく違うのは、母后が太子の出奔後間もなく死んだこと、父王の建てた寺が三寺であったことであるが、これは〈京大2〉系の三本では、物語のはじめの方（2の条）で既に叙べられている所である。

〈刊本〉は、前記のごとく、この条のはじめの部分に〈天理〉と同文の一節があるが、そのほかは〈天理〉とは離れて、〈京大2〉系に近い内容である。「さいりん寺・ちくりん寺・くわうりん寺」の三寺を建てたことや、父王が太子に「玉の冠」と「国の巻物」を譲ったとある。ただし、母后の死と供養のことは記してない。〈刊本〉も母后の死は(2)の条で叙べている。

〈京大1〉この条も他本とは著しく異なる本文である。東城国の内裏の様を叙べる所も独自の文章である。父王が遁世した場所も「とうりようさんの麓」とし、寺の名を記さない。とくに大きな相違は、太子が父王に向って、西城国での出来事を物語ることが入っている点である。ただし、その所の本文には脱文があり、次のようになっている。

ゑ(父王)ひらんあらせたひつ(ゆこ)ゝ、ふしきやな、御身はかくまておとろへはてゝけるそや、たいし此よしきこし

このさひしやうこくのかみに、いろ〳〵の事あるをおちたるか、六儀すくなし、しかれともほんのことくうつし(申カ)す候なり

めし、さひしやうこくのしる(あカ)し、けんしんわうはこれをきゝ、かのひめみやとわれらを、たつせのほらへなかしつゝ、とし月をおくりしに、二人のわうしをまふけしなり、百くわんはんみんをたまわって、かのわうしをむかへとり、くにのあるしにいはふへし

こうしてすぐに、太子は大勢の官人を引き具して王子や姫宮を迎えに出立する。他本のように母后の死を弔う記事がない。

〈筑土〉は全体に簡略な叙述である。〈天文〉系とも〈京大2〉系とも特に通う所がない。父王の隠遁した場所は単に「ある山

寺」とする。母后のことも出ていない。

(14)太子の母后の死

〈天文〉 こゝにふしきの御ことあり、ちゝのきさき、このほとの御なけきにやよりけむ、御身にちうひやうをうけさせ給ふ、さるほとに、いろ〳〵の御くすりをおんまいらせありけれとも、さらにそのしるしもなくして、七日と申すに、おんいのちをはり給ふ、御なけきはなか〳〵申はかりもましまさす、さてあるへきにあらされは、のへのをくりをあそはして、一へんのけふりとなしたてまつるそあはれなる、七日の御とふらひ、申もなか〳〵をろかなり

〈武田〉 さるほとにはわのきさき、ひころのなけきのつもりにや、にはかに御ややみあって、七と申に御かくれあって、たうりてんにしやうし給ひぬとさんのん

右のように〈武田〉は〈天文〉と同じ事実だけを簡単に記す。

〈天理〉 やかてたいしを御くらゐにつけたてまつり、いく程なく、ちゝ宮は御なうしきらせ給ひ、七日と申にほうきよならせ給ふ、御なけきかきりなし

〈刊本〉 さて。太子に。御たいめんあって。たまのかふりと。国のまき物相そへ。やがて。くらゐに つけ給ふ。いくほどなく。ちゝほうわうは。御なうならせ給ひて。七日と申に。御ほうぎよならせ給ふ。太子御なげきは限なし。

右のごとく〈天理〉と〈刊本〉は、ほとんど同文の所が多い。ただ〈刊本〉は父法王が亡くなったとする。〈天理〉の父宮は不明確な語で、〈天文〉の父の后とも通う所があり、父母いずれを指すのか明らかでない。

以上の諸本に対して、その他の〈京大1〉〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉〈筑士〉の各本には、母后の死の記事がない。〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉の三本は、太子が見ぬ姫宮にあこがれて国元を出奔した後に、母后が歎きの余りに世を去り、父王も出家したと叙べる（2の条）ので、ここに母后の死の記事がないのは当然である。〈刊本〉も〈京大2〉系の三本と同様であるので、ここでは父王の死としたのであろう。〈京大1〉と〈筑士〉は、母后の死のことはどこにも叙べていない。

(15)太子、姫宮と王子たちを迎えに出で立つ。

〈天文〉と〈武田〉は、母后の四十九日の中陰が過ぎて、すぐに太子が旅立ったとあるのに対し、〈天理〉と〈刊本〉は六年八月を、〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉は十年余りを過ごしたとする。これらの年数は、太子が姫宮や王子と別れた時からの期間をいうらしい。〈筑士〉は、

しかれとも、せんちやう大しは、たつ瀬のほらにわたらせたまふ二人のわうし、あしゆくふ人の御事のみ、あんし暮したまふはかりなり

と叙べるだけで、太子の出立のことを記さない。〈京大1〉は、叙述内容が他本と全く異なり、太子の帰りを迎えた父王が、喜んで烽火を上げると、昔の臣下たちがはせ集り、太子は数千人の随身を従えて、すぐに出立したと語っている。

(16)山中に残された姫宮は、太子の帰りを待ちかね、二人の王子を連れて旅に出で、辛苦の末に鹿野苑に辿り着く。

〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉の三本は、旅の間の辛苦を、〈天文〉〈武田〉よりもくわしく次のように叙べる。

〈京大2〉 いたわしやはゝみやは、A いつならわせたまわんかみふすまをめされて、かこをひちにかけたまひて、しらきのつゑをちからにて、二人のわうしをさきにたて、此ほとのものうくすみなれし、たつしよのほらをたちいてゝ、人めもしらせたまはさる、さいしやうこくのたひのみち、おもひやるこそかなしけれ、さむやつめたや、むねくるしや、わうしたちとのたまへは、二人のわうしたちは、はゝこのかなしみたまへは、ひたりみきにすかりて、はゝをそさきへすゝめ、てをひく事もいとけなし、おんなの身なれは、いそくとすれとはかゆかす、おつるなみたにむせひて、みちのくさはもみゑわかす、たま〳〵事とふものとては、みねにおちくるさをしかの、つまよひかねてさけふこゑ、われをとうかとあわれにて、うちあけみれは、やまちのそわつたい、ちなくていかゝせんと、かつきのほるさねかつら、つたいてとをるいわのかと、てをひきつゑとちからにて、のほり下りてゆくほとに、ほんみちをはふみちかへ、かんとうにかゝりてまよひゆくこそかなしけれ、みちゆく人もあらはこそ、すへはさとかととふへきに、みゝにおちくる物とては、わうかほくてきと、いわまをつたふ水のおと、何にいのちのつなかれて、さのみ日かすをおくるへき、物うきほらをたち出ゝ、きのふけふとはおもへ共、二年六月と申には、これや此おとにきく、六やおんのはらなる、しやくせんたんのこのもとまて、まよひそつかせたまひける

〈慶應〉〈学習院〉も細部の異同はあるが、大筋は同系の文章である。〈学習院〉はここでも姫宮の歌二首（「新古今」哀傷の部の和歌）を入れる。

これに対して〈天文〉〈武田〉の二本は次の通りである。

〈天文〉 いまたならはぬたひのみちに、おほしめしたゝせ給ふそいたはしき、かくて道すからのありさま、ゆきもやりたまはぬ御ふせひ、めもあてられぬ御ことかな、ささきの御あしのいたきにあひそへて、わかきみたちのいたはり給ふを、ひとりつゝかはり、おふついたきつしたまふことこそ、中〳〵いたはしけれ、かくていそきたまふほとに、ろくやをんにほとなくつかせ給ふ

〈武田〉 ならはぬたひにいてたまふ、みちすからのものうきことかきりなし、やう〳〵いそかせ給ふほとに、すてにろくやおんのはらにそいてさせ給ふ

右のように〈京大2〉系に較べ遙に簡略である上に、叙述内容も共通する部分がほとんど見られない。

次に〈天理〉と〈刊本〉とは、次のように、はじめは同文でありながら、途中から急に離れてくるという、特異な関係を見せている。

〈天理〉 さて、たつせのほらにすてられ給ふ人は、わうしたちをちかつけて、いかにきゝ給へ、ちゝせんしやうたいし

は、六年六月の御やくそくありしか、六ねん八月になるまて、御おとろきも候はて、今ははやいかなる人にもあひなれ給ひて、身つからをこそわすれ給ふとも、二人のわうしをはいかゝすて給ふへき、もしみちにてあひ申事もやあるへきと、とうしやう国におもひ立給ふ、御ありさま、やれたるかさにすかこも、たのむものには杖はかり、せんくわうをさきにたてゝ、せんしんかてを引、あしにまかせて出給ふ、ふ人の御心の内こそあはれなれ、あふ人もなき山中に、つまこふしかの音をなき、いとゝ身の上に思ひねの、まくらにたのむさゝの葉の、うきふししけき風の音、なをすさましや行末も、虎ふすのへと聞からに、いのちも今はあやしくて、いとけなき身をとにかくに、なくさめかねてほとなくも、二とせ三月と申に、ろくやをんのはらにつかせ給ふ

右のはじめの傍線部分は、〈刊本〉もほとんど同文であるが、その後は左のごとくである。

〈刊本〉 もしみちにて。あひ申事もやあるべきと。おほしめし。さいぢやうこくをこゝろざし。たちいてさせ。たまひて。いとけなきわかたちを。あとやさきにたて。とかくこゝろをなくさみて。三年三月のたびのみち。たどりあゆませ給ふ。御こゝろのうちそいたはしけれ。あにのせんくはうは七さい。おとゝのせんしんは五さい、あにせんくわうのうたにかやうに。あそばして。いくばくの山をすぎ。あかしくらし給ふ。御ありさま。たゞひとへに。いとけなきものゝ。さいのかはらに。まよふも。かくやとおもひしられたり。たゞなくさみ。給ふ事とては。ちゝのわたらせたまふ。ところへ、いそがせたまふこそ。あはれなり。やう〳〵ゆかせ給ふ程に。二年三月と申に。てんぢくにきこえたる。ろくやおんにつかせ給ふ。

両者の本文が変ってくるのは、「とうしやう国におもひ立給ふ」〈天理〉「さいぢやうこくをこゝろざし」〈刊本〉という所からである。このことは、太子の本国を〈天理〉は東城国、〈刊本〉は西城国とすることと関係があるのかもしれない。さらに〈天理〉の傍線Bの句は、前掲の〈京大2〉のAの句と通う所がある。またCの部分も、〈京大2〉系における旅中の辛苦を叙べる描写と無縁ではないことを感じさせる類似性がある。Cに当る所を〈刊本〉はDのように叙述しているが、こういう内容の文は〈刊本〉以外には見出せない。〈刊本〉の和歌も他本にはない独自の部分であることと併せて、〈天理〉の方に〈刊本〉より先行する本文の性格を見ることができるように思われる。

以上の諸本に対し〈京大1〉は、山中の獣（十二の生き物とも記す）が姫宮と王子に食物を運び、日夜守護したという独自の記事を含み、本文も他本との承接関係が認められない。また〈筑土〉は特徴的な記事はないが、本文は独自の文章である。旅の間の辛労については、

そこともしらぬみやましを、あしにまかせて行たまふ御あり

さま、ものによく〳〵たとうるに、ちかいもたへて、かいしやうにうかへる舟のことくなり

とだけ、簡略に叙べている。ただ鹿野苑までの年月を二年三月としているのは〈天理〉〈刊本〉と一致する。

(17)夫人は病いに倒れ、二人の王子を残して空しくなる。

ここも〈天文〉と〈武田〉は同類をなし、それに対して〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉の三本は同系の本文を有する。そして後者は、夫人が死に臨んで王子に言い残すことばが、前者よりもずっと細かに語られている。〈京大2〉系三本のうちでは、〈慶應〉は簡略化されている個所があり、〈学習院〉は、ここでも「新古今」の和歌三首を夫人の歌として入れている。

次に〈天理〉と〈刊本〉の間では、この条の本文は離れている。〈天理〉には、病いに伏した母のために「あにこせんはろとうにたち、道行人にものをこい給ふ」とあるが、〈刊本〉にはこの記事がなく、〈京大2〉系には「あにのせんくわう殿、さきにいつるときは、おとゝのせんしん殿、うちにとゝまりて、はゝをかいしやくたてまつる」と叙べられている。また、夫人が王子に形見を残すことは〈天理〉〈刊本〉〈京大2〉系ともにあるが、その品は〈天理〉は紙衣・笠・杖、〈刊本〉はかんざしと肌の守りというように異なっている。〈京大2〉系は紙の衾・笠・杖・鉢などで、これも〈天理〉と〈京大2〉系が近い。

〈京大1〉はこの条に一丁分の欠丁があり、明らかでない。〈筑土〉は、形見の品を、太子が残した笛と、肌の守りとする。前者はこの本独自であるが、後者は〈刊本〉と通ずる。なお〈京大1〉〈筑土〉ともに、夫人の年を二十七とするのは〈天理〉〈刊本〉と合致する。

(18)残された二人の王子は母の亡骸を火葬に付し、遺骨を首にかけて、父の本国へと急ぐ。

〈天文〉〈武田〉は簡略なのに対し、〈京大2〉系統の三本は、その四倍ぐらいの長さをもち、王子たちの嘆きと、再び旅を続ける道の辛苦を語っている。また〈天理〉と〈刊本〉とは大部分全くといってよいほど同文の本文であるが、〈刊本〉には再び旅に出た王子の夢に母夫人が現われ、父との再会の近いことを告げるという記事がある。〈京大2〉系の三本にも、夢のことに触れた叙述があるが、それは、

〈京大2〉 物かなしきはよるのねさめにとゝめたり、あなたのくさのかけには、ちゝはゆめにみへたまふかや、こなたのしはのかけには、はゝこのゆめにみへたまひしそとて、いちとにわつとそなきたまふ

というもので、〈刊本〉とは内容が違っている。関連があるかどうかは疑問である。〈京大1〉は、叙述内容は〈京大2〉系に近いが、長さはその半分程度である。この本にも夢の記事があり、それは母夫人が二人の王子の枕上に立って、東城国への道を教えるというもので、この方は〈刊本〉と通ずる所がある。〈筑土〉は〈天文〉〈武田〉と同じ程度に簡単な叙述であるが、

文章は全く違っている。

(19)王子たちは父太子の迎えの行列に出会い、近づいて素姓を名のる。太子は王子と共に夫人の死を嘆く。

〈京大2〉系の三本は、貴人の行列を見た二人の王子は、亡き母の教えに従い、先祖を名のって父の行方を尋ねようと近づく。官人たちは化生の者かと兄弟を杖で打ちすえる。輿の中の太子は我が子と同年程の兄弟を憐み、間近く召して素姓を問う。二人が父母の名を名のるのを聞いて、太子は夢かと喜ぶが、次には母が旅の途中で空しくなったと知って、消え入るばかりに悲しむ、というように情景をくわしく叙べている。これに対して〈天文〉〈武田〉の二本は、やはり遙に簡略で、夫人の遺言のことや、王子が官人に打たれることなどを記さない。

〈天理〉と〈刊本〉とは、文章が異なる上に、叙述内容にも相違する所が見られる。〈刊本〉は、大筋は〈京大2〉系と似通った運びであるが、〈天理〉は、父の太子が鹿野苑の原に輿を止め、虎狩を催したとある。これは他本にない独自の記事である。王子兄弟が官人に杖で打たれることは〈天理〉〈刊本〉ともにある。

〈京大1〉も〈京大2〉系と内容は似通っている。王子が打たれることもある。独自の記事としては、王子が母夫人から形見として残された黒髪を父の太子に渡すということが叙べられている。〈筑士〉は、太子が輿の中から行列の側を通る兄弟を見つけ、不審に思って呼び寄せたとあり、これも特徴のある叙述である。

(20)太子は王子の案内で、夫人の最期の場所を尋ね、嘆きに沈む。

〈天文〉〈武田〉の二本にはこの記事がない。〈京大2〉系の三本は、ここでも最も詳細であるが、〈慶應〉と〈学習院〉はほぼ似通っているのに対して、〈京大2〉は叙述内容に違いが見られる。〈慶應〉は、夫人の最期所での太子の嘆きのことばを次のように叙べる。

いかにやきさきのみや、たいしこそたゝいまさいしやうこくよりまいりたれ、あれはたいしかと、いま一たひかいなき御こゑなりとも、きかせてたはせ給へとて、又はら〳〵となき給ひての給ふは、いたはしやひめみや、われたんしよのほらを出しとき、あのせんくわうをはさきにたて、おとゝのせんしんをは、さんこのむねにかきいたき、みつからかたもとにすかりつきて、いか成とらふす野辺のすゑまても、もろともにつれてゆけとしたひ給ふを、なこりのたもとをふりきりて、やくそくかたく申せし時に、うらめしけなるふせいにて、たちかへり給ひし御うしろすかたをみおくりて、それをさいこのみはてにて、またもあひみぬかなしさよ、こはいかゝせんとの御なけき、なにゝたとへんかたはなし

〈学習院〉は、この後に例によって「新古今」哀傷の和歌四首を太子の歌として載せるほかは、〈慶應〉とさして変らない文である。しかし〈京大2〉は、夫人の最期所へ来た太子は、夫

人の塚を掘らせて遺骨を取り出し、骨の上に十二ひとえの衣をかけ、王子と共に十念を唱えたと叙べる。そして、骨に向って語りかける太子のことばを記すが、それは、

いかにふ人、くさのかけにてもきゝたまへ、うかりつるほらにとめおきまいらせて、ふる里にかへるは、御みとわうしをよにあらせんためにこそ、かへりて候へし、さこそかなしく、御うらみにもおほしめしつらん、かたときもはなれ申事なく、やかてかへりまいらせんとをもわし(ママ)に、何となき事にうちくらして、今までまいらす候に、そなたもおなし御心に、二人の物ともをひきつれ、これまてわたらせたまひける、御こゝろのほとこそいたわしけれ、御いのちありて、これにてまいりあひて候はゝ、いかにくゝうれしくおほしめし、おもふへきに、さきたちたまひ、むしやうのならひなれは、せひにおよはす、御いたわしき事かなとて、御そてしほりたまふ

というもので、〈慶應〉や〈学習院〉とは大分違っている。なお、この後、三本の本文は三様に離れてゆき、それぞれ独自の叙述を見せている。

〈京大2〉と同じ様に、夫人の遺骨のことに触れているのは〈刊本〉である。〈刊本〉は、夫人の最期所に白骨が散乱していたのを、官人たちが拾い集め、太子はそれを輿の内に納めたとある。そして太子のことばを、

くさのかげにて。きかせ給へ。うかりしほどに。とゝめまいらせて。われはこきやうへかへり。御むかひに。まいり候はんと。おもひ申つるに。くさのかけにて。さぞうらみにも。おほしめすらん。さりなから。さいじやう国にかへり。子どもをくらゐに。つけんために。又たつせのほらにと。いそきしも。ふにんにあひたてまつらん。ためなるにと。おほせられて。

と記すが、これも〈京大2〉の太子のことばと通う所が見られる。次に〈刊本〉と交渉の深い〈天理〉は、夫人の骨に関する記事はないが、太子の嘆きのことばには〈刊本〉と同文の部分がある。

〈京大1〉と〈筑土〉は簡略に叙述する。夫人の骨のことは記さず、〈筑土〉には太子の嘆きのことばもない。ただし〈筑土〉は夫人の最期所に墓をたてて弔ったとある。

ところで、前の(18)の条では、すべての諸本が、夫人が鹿野苑で空しくなった時、王子たちはその遺骸を火葬に付し、遺骨を首にかけて再び旅を続けたと叙べている。従って、ここで〈京大2〉〈刊本〉のように、太子と王子が夫人の最期所へ行き、そこで骨を拾ったと叙べるのでは矛盾が生じる。〈学習院〉では、王子が太子を「むしよ」(墓所)へ案内したとある。火葬にした場所というくらいの意味で墓所といったのかもしれない。それが〈慶應〉では「こんしよ」と書かれている。「こんしよ」の意は考え得ないが、あるいは「たんしよ」の誤写で「壇所」の意ではないか。壇所であると、夫人の跡を弔うための壇があったことになり、そこから〈京大2〉の、塚を掘って骨を取り出すというような叙述が生じてきたことも推測できる。

〈慶應〉や〈学習院〉のような形が、この条の記事の全くない〈天文〉や〈武田〉よりも後出と断ずることはできないが、少なくとも〈京大2〉や〈刊本〉の、夫人の遺骨に関する記事は、新しい付加ではなかったかと考えられる。

(21)太子は出家して法蔵比丘と名のり、修行を積んで阿弥陀仏と顕れた。また、夫人は薬師如来、二人の王子は観音・勢至の二菩薩と現じた。

〈天文〉 せんしやうたいしは、これよりすくに御とんせいもあそはしたくは候へ共、きさきの御ゆいこつ(こんか)のありつるにとて、わうくうにかへらせたまひて、ふたりのわかきみに御世をゆつりたまひて、御とし廿七と申すに御とんせいをめされて、御なをはほうさうひくとそ申たてまつる、A わか御身にくをうけ、おもひをめされしこととともをおほしめしつゝけて、一さいしゆしやうをみちひき給ふへき大くわんををこし給ふ、くわんにまつ十あり、一には B 一しやうふしならん、二にはいちこすいめむせし、三にはしやうあらんものをころさし、四にはぬしあらんものをとらし、五にははらたつることあらし、六にはもうこせし、七にはくさきのえたをおらし、八にはいちこむまにのらし、九にはうへたらむものにしきをあたへん、十にはさむからむ人にころもをあたへん、かねては又、きせんなんによ、ろうしやう、一人ももらさす地こくにおとさし、そのくにわれかはらん、十あく五きやく、はかいむさんのものをもきらはす、みな〳〵ことく〳〵くたすけんと、ちかひたまへり、をよそしやうとをしやうこんし、しゆしやうをゐんたうせんかために、四十八くわんをたてたまへり、そのくわんいろ〳〵(いちにか)にしやうしゆして、C いまけんさいに西はうにまし〳〵き、しゆしやうをさいとし給ふ、まつ代のとうそく、こと〳〵くそのひくわんをあふくへし、又ひめみやはたひのそらにて、やまふのゆかにふしたまひて、そのまゝむなしくなり給ふ御しんらうをおほしめして、D 一さいしゆしやうのやまひをたすくへしとの御ちかひあり、さてこそやくしによらいとはなりたまひたり、E されは一わうのきには、けん世(よ)のやまふと候へとも、まことにはむけんならくのかとさしとて、ちやうやのやまひをたすけたまへり、これ又、とうはうしやうるりせかひをかまへり、F 一さいしゆしやう、いまたこゝろさたまらすして、やくしによらいとしんすれは、いのちをはるときは、ほさつをつかはして、さいはうのしやうとへをくらせ給ふなり、G 地さうほさつはまた、地さう、ほうさう、とうたいいみやうにしてをはします、みたの御くわんは、はしめは六十くわんなりしを、十二くわんやくしにふそくし給ふなり、これせんなる御事なり、また二人のわうしは、くわんをん、せいしにてをはします、これ又このかいにけんして、しゆしやうをたすけ、西はうにすゝめ入しめたまへり

〈武田〉 右の〈天文〉と同趣旨の内容をもち、文章も似通った所が多い。全体にやや簡略で、DEGの部分はない。またAの個所は「わかみにて、一さいしゆしやうをみちひきたまふへき大くわんをおこしたまへり」とあるが、「わかみにて」の語は

〈天文〉のAの句に照して考えると、その意味を理解することができるのではないか。Bの個所の〈武田〉は、「一しやうふおむ」とある。「一生不犯」であろう。〈天文〉の「一しやうふし」も「不犯」を「不死」と誤読したものと思われる。Cの「いまけんさいに」は、〈武田〉には「こんけんに」とある。これは「今現在に」から生じた誤りであろう。このように、〈天文〉と〈武田〉のこの条の本文は、かなり密接な関係をもつことが窺われる。

次にこの条において〈天文〉〈武田〉と非常に近い本文を有するのは〈慶應〉である。太子が法蔵比丘と名のって、十の大願を発したことを叙べるのは、〈天文〉〈武田〉のほかには〈慶應〉だけである。とくに本文は〈武田〉の方に近く、前掲〈天文〉のDEGの文はなく、〈武田〉にはFの個所に「されは、みたとやくしは、せんせのふさいにてましゝける」という文が入っているが、〈慶應〉にも「されは、みたとやくそくしは、ゐんいのときふうふにてまします」の文がある。この条に限っていえば、〈武田〉と〈慶應〉との間には直接的な交渉があったと見なければならない。

〈天理〉と〈刊本〉のこの条は全く同文である。叙述内容はやはり〈天文〉や〈武田〉に準じているが、法蔵比丘の十の願のことはなく、

ちゝ大わうは三十三と申に、ふにん御ほたいのために世をいとはせ給ひ、こきすみ染に身をやつし、御名をほうさうひくと申也、そのゝち、なんきやうくきやう、こうをつみて、しやうとうしやうかくし給ひ、あみた仏と成給ふ

と、簡略に叙べてある。夫人に関しては、

又あしゆくふ人は、ろくやをんにてくすりなかりし事をかなしみ、我ねかはくはほとけになり、一切衆生のやまひをたすけんとちかひ給ひぬ、もし衆生一切はかなきみゝにふれ、たのむ心をたすけすは、しやうかくをとらしとちかひぬ、あみたはもと六十大くわんをはおこし給しを、十二大くわんをはやくしにゆつり給ひて、四十八くわんをたて給ふ、やくし十二神をあらはし、よるひる十二ときをまほりたまふ

とある。〈天文〉〈武田〉と同趣旨であるが、傍線の薬師十二神のことは〈天文〉〈武田〉にはなく、後記の〈京大2〉〈京大1〉に見える記事である。

以上の諸本に対して、〈学習院〉〈京大2〉〈京大1〉〈筑土〉の諸本は、それぞれに独自の特徴を備えた本文を有する。

〈学習院〉は、太子に関しての記事は、次のように著しく簡単である。

さて、此山のふもとなる、たつときそうのましますお、しやうしたてまつり、しゝやうとさため、御くしをろして、御なおはほうそうひくとなつけて、しやくせんたんのこのもとに、しはのいほりおむすひて、おこなひすましておはします、御とし八十三と申に、ねはんにいりたまいぬ、あみたほとけとあらはれて、しゆしやうおりやくしおはします

しかし、夫人の薬師如来に関しては、どの本よりも叙述がくわしい。

きさきのみやは、やくしによらいとあらはれたまふ、われはかなく成しとき、いしやのなきことをかなしみたまひて、くすりのほんけんとあらはれたまふとかや、なつなをつみしかたみこそ、なかのつほとも成にけり、此つほのなかよりも、ひやくしゆのくすりおとりいたされたり

と、瑠璃の壺の由来にも触れ、この後に天竺の故事を引いて薬の徳を説いている。阿弥陀の六十願のうち十二願を薬師に付属したことも叙べてある。

〈京大2〉は、太子の出家の条を非常にくわしく叙述する。太子は供の官人たちを皆々帰し、王子と三人で諸国を修行する。夫人の一周忌には七重の塔をくみ、そのほかさまざまの善根を積む。三年目に、ある山里で出会った老僧を師として髪を剃る。その時、野中に俄に池が湧出し蓮華が開いた。老僧は、太子に阿弥陀仏、二人の王子に観音・勢至と、それぞれに法名を授けると、かき消すように失せた。この老僧は実は大日如来であった。その後、三人はいよいよ修行を積んで仏となり、六十願をおこした。このように、他本とは全く違った語り方である。とくに、大日如来によって、阿弥陀・観音・勢至と顕れたとする語り方は注目される。次に、夫人が薬師と顕れ、阿弥陀より十二願を受け取ったとするのは諸本と同様であるが、そこでも「十二しんをまへたち、やかて十二ときを一ときつゝまほりたまふ」という記事を加えている。さらに、薬師は夫人の本国東城国に浄土を建て、太子も本国西城国に浄土を建てたと叙べる。これも独自の記事であるが、東城国と西城国の関係が、伝本によって逆になっている点を考えるに、一つの示唆を与える記述である。

〈京大1〉も、太子が王子を伴なって天竺の諸国を修行したと叙べる。また、十二類の獣が薬師の十二神と現じて日夜を守護したと叙べ、共に〈京大2〉に通じる特徴を有する。しかし〈京大2〉よりずっと簡略で、薬師の十二願に関する記事もない。

〈筑土〉は諸本中最も簡略な叙述であるが、太子は天竺・唐土・日本の三国を修行したとし、夫人の現じた薬師については「しゆちやうしつしよの、くなんのはらいくすりをは、るりのつほにいれてもちたまふ」と、瑠璃の壺のことを記している。

(22)結尾の勧化の文

諸本いずれも、弥陀を信じ念仏申すことを勧める趣旨で一致するが、文章は一本ごとにすべて異なっている。ただ〈天理〉には、最後に次の文を付してある。

是を見きくひと〳〵は、夢まほろしの心地して、うつゝとは更におもはれす、おもしろさといひ、きとくといひ、一かたならぬふしきなれは、人〳〵のほうひなのめならす、こそて三十重、しやきん十りやう給はりて、みこおとゝひはかへりけり、なんと申はんへりき

この一文は「花鳥風月」の末尾の文と全く同じである。何故この文が入ったのかわからない。天理図書館の同系の別本には、この一文はない。

以上、便宜的に物語全篇を二十二の場面に区切って、諸本の異同の実態を掲げてみた。これを試みに一覧表に整理してみると次のごとくになる。＝で結んだ本はほぼ同文に近い本文を有する関係、―は文章には相違があるが、全体的に叙述内容が類似する関係、…はかなり離れているものの、部分的に脈絡を考え得る関係を示す。記号で結ばれていない本の間には、本文を関係づけるに足る類似性が見られない。

(1)天文―武田　天理＝刊本　京大2＝慶應―学習院　京大1・筑土ナシ
(2)天文―武田…京大1…天理　京大2―慶應―学習院…刊本　筑土
(3)天文…武田…天理　京大2―慶應―学習院…筑土　京大1　刊本
(4)天文―武田…天理　京大2―慶應―学習院…筑土　京大1　刊本
(5)天文―武田…天理　京大2―慶應―学習院…京大1…刊本　筑土
(6)天文…武田…天理　京大2―慶應―学習院　刊本　京大1　筑土
(7)天文―武田―天理　京大1　京大2―慶應―学習院…刊本　筑土
(8)天文＝武田―天理　京大2―慶應―学習院…刊本　京大1　筑土
(9)天文―武田　京大2―慶應―学習院…刊本―天理…京大1…筑土
(10)天文―武田…天理―刊本…京大2―慶應―学習院　京大1　筑土
(11)天文―武田…天理…刊本…京大2―慶應―学習院　京大1　筑土
(12)天文―武田…天理―刊本…京大2―慶應―学習院　京大1　筑土
(13)天文　武田　天理…刊本…京大2―慶應―学習院　京大1　筑土
(14)天文―武田…天理―刊本　京大2・慶應・学習院・京大1・筑土ナシ
(15)天文―武田　天理＝刊本　京大2―慶應―学習院　京大1　筑土
(16)天文―武田　天理―刊本　京大2―慶應―学習院　京大1　筑土
(17)天文―武田　京大2―慶應―学習院…天理…刊本　京大1　筑土
(18)天文―武田　天理―刊本…京大2―慶應―学習院　京大1　筑土
(19)天文―武田　天理　刊本…京大2―慶應―学習院…京大1　筑土
(20)天文・武田ナシ　慶應―学習院　京大2…刊本―天理　京大1　筑土

(21)天文—武田—慶應…天理＝刊本　学習院　京大2…京大1
筑士
(22)天文　武田　天理　刊本　京大2　慶應　学習院　京大1
筑士

この表によって明らかなのは、〈天文〉と〈武田〉の二本、〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉の三本が、それぞれ同類をなすことである。〈天文〉と〈武田〉との間は、本文の形態の上では相当に離れている部分が多いので、同類といっても、どのような系譜関係を想定すべきかは判断し難い。ただ、文章としてみれば〈天文〉の方が整っており、文意不明瞭な個所が少ない点で勝っている。〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉の三本の関係は、〈天文〉と〈武田〉の間より遙に密接である。本文の形態の面でも骨格を一にしていると言える。同じ源から派生した伝本であると認めて良いであろう。その中での各本の特徴を挙げれば、〈学習院〉は和歌が非常に多く、その多くは「新古今集」所出のものである。これは明らかにこの本独自の潤色であることを示している。また〈京大2〉は、前掲の引用文に見られるように、他本よりも七五調を基調とする部分が非常に多い。これは一種の語り物として行われていた伝本ではなかったかと想像せしめる。それに対して〈慶應〉には、とくに独自の特徴というべきものは見られないが、前表の21の条だけが〈武田〉と著しく接近している点が問題となろう。この条は〈学習院〉も〈京大2〉も、それぞれ独自の本文をもっているが、弥陀と薬師に関する宗教的な教説を叙べる部分であることから、筆者による書き替えが行われ易かったこともあろう。しかし、〈慶應〉が単にこの条だけを〈武田〉系統の本によって改めたとしてよいかどうか疑問である。後記の古浄瑠璃の正本が、この〈慶應〉系の伝本に基づいて作られていることとも併せて、〈慶應〉の伝本としての位置には注目すべき点がある。

以上の〈天文〉〈武田〉を甲類、〈京大2〉〈慶應〉〈学習院〉を乙類とすると、乙類は甲類に比して、前記の二十二の各条の多くの部分で叙述が詳密である。太子があしゆく夫人と結ばれる経過、太子と夫人が山中で処刑されようとする場面、太子が夫人と王子を残して本国へ帰る場面、夫人が旅の途中で病いに倒れた場面、太子と王子との再会の場面など、物語の主要な節々において、いずれも乙類本はその状景を細やかに描写している。この物語の聴き手に哀れをそそる効果からすれば、乙類本の方がすぐれていると言えるであろう。

次に、甲類と乙類の間に見られる筋立の上の大きな相違としては、左の二個所がある。

(イ)甲類は、太子の国を東城国、あしゆく夫人の国を西城国とするのに対し、乙類はその逆である。

(ロ)乙類は、太子が見ぬ恋にあくがれて国元を出奔した時、太子の母后は嘆きの余りに世を去り、父王は、さいりん寺・ちくりん寺・かうりん寺の三寺を建てて隠栖したとするが、甲類では、太子が帰国して、くわうりん寺に隠栖していた父母と再会を遂げた直後に、母后が亡くなったとある。

（イ）については、本作の原拠と目されている「今昔物語」の善生人説話、および「覚禅抄」所引の「大乗毘沙門経」ともに、太子と夫人の国名は甲類本の方に一致する。従って単純に考えれば、甲類本が先出で、乙類本は後出ということになろう。

（21）の条で、〈京大2〉には次の文がある。

さて、やくしは御国なれは、とうしやうこく□□たうをたてさせたまふ、あみたほとけは四十八くわんをもつて、たとへ十あく五きやくの物なりとも、一ねんなむあみたふつと申ならは、一さいしゆしやうこくらくゑまいらん事うたかいなし、かくて、あみたも御国なれは、さいしやうこくに、さいはうしやうとをたてさせたまふ

これによると、薬師の東方浄土と阿弥陀の西方浄土を、東城国と西城国に結びつけ、そこから薬師の本地である夫人を東城国に、阿弥陀の本地である太子を西城国に配したごとくに思われる。このような理由で、原説話を継承した〈天文〉系の国名を逆にしたとも考え得るが、右のような記事を有する本は〈京大2〉のほかに見られないので、後に付加された説明であるのかもしれない。

（ロ）については、原説話には太子の父母の遁世や死のことはない。甲類では、太子の国元出奔の条には父母のことを何も記さず、帰国してみると、父母は王宮を捨てて隠栖していたとある。そして、折角太子が父母との再会を遂げたのに、直後に母が亡くなったという筋をかまえたのは、その仏事のために太子が夫人と王子を迎えに出立するのが遅れ、夫人は約束の日数が過ぎても太子が帰らないので、待ちきれなくなって旅に出たとする所に理由がある。乙類本では、母の死を太子出奔の時とするので、帰国した太子は、亡き母の孝養と、父王から位を譲られ、政りごとのために、夫人と別れて後十年余の時を過したと叙べている。王子の将来のために夫人と辛い別れをしてまで帰国した太子として、このような乙類の語り方には適切でない所が感じられる。〈天文〉系の、太子帰国の喜びの最中での母后の死という叙述に不自然さを感じ、それをより適切な太子出奔時に移した上、夫人王子の迎えが遅れたことを強調しようとしたために、このような形に変化したのではないかとも考えられる。

右のごとく、甲乙両類の関係については、甲類から乙類への変化として考えるのが穏当であろうと思うが、この二類の間に立って複雑な性格を見せているのが〈天理〉と〈刊本〉の二本である。

〈天理〉は、太子と夫人の国名は甲類と同じ、太子の父王の遁世に関する記事も甲類と同様であるが、母后については全く触れていない。太子帰国後に亡くなったのも「父宮」としている。これに対して〈刊本〉は、太子と夫人の国名も、太子の父母に関する記述も乙類に属する。ただし、太子帰国後に父王も亡くなったとするのが、乙類とは異なる。そのほか、前掲の表にあらわれているように、〈天理〉は〈天文〉〈武田〉と、〈刊本〉は〈京大2〉系と通う所が諸所に見られる。

そのように〈天理〉と〈刊本〉とは、それぞれ甲乙両類に近

い性格をもつが、一方で、この二本の本文は部分的に何個所も全く同系の文章を含んでいる。二本の間には、どうしても直接的な承接関係があったと認めざるを得ない。すると、〈天理〉と〈刊本〉の同文の部分は、どちらが元であるかが問題となる。そこで一つの手がかりになるかと思われるのは、太子の父母に関する記事である。〈刊本〉は、太子出奔の時に乙類本と同じく母后の死を叙べ、さらに太子帰国後に父王も死んだとする。甲類本は、太子帰国後に母后が死ぬのであるが、〈天理〉はそこの所で、

やかてたいしを御くらゐにつけたてまつり、いく程なく、（大王はイ）ちゝ宮は御なうしきらせ給ひ、七日と申に、ほうきよならせ給ふ

と叙べる。父王を「父宮」と記すのはやや異例で、同系の天理別本では「大王」となっているのも、そのための改訂ではなかったかと思われるが、〈天文〉では「父の后」、〈武田〉では「母の后」と記しているのに照すと、あるいは「はゝ宮」または「ちゝの后」を誤ったのかもしれないと考え得る。それはともかく、〈刊本〉は〈京大2〉系の乙類本に拠りながら、部分的に〈天理〉系の本文を取り入れて独自の本文を作ったために、前に母后の死を叙べたにもかかわらず、再び〈天理〉系に引かれて、父の死をも記すことになったのではないかと推測できるのである。

いま一つは、(9)の条で指摘したごとく、太子と夫人が内裏から武士に引き立てられてゆく所の〈刊本〉の文に、

さいじやうこくのみやこを。いまだよぶかに出（いで）たまふ

とある。〈刊本〉は夫人の国を東城国としているのであるから、ここは当然「とうじやうこく」でなければならない。これは甲類系の〈天理〉に、

さいしやう国のたいりを、いまたよをこめて出給ふ

とあるのを、国名を直すことを忘れて、そのまま使ったためではないかと考えられよう。以上によって、断定するのは控えるが、〈天理〉は甲類系に属する伝本で、〈刊本〉は乙類系を骨格に、〈天理〉系の本文を折衷した本であったと考えたい。なお〈天理〉と〈刊本〉には、冒頭に序文ともいうべき長い説教調の文がついているのが特徴である。そこには近世初期の仮名草子風の読み物として、この物語を提供しようとする意図が感じられる。〈天理〉系が〈刊本〉に先立つとしても、この系統の伝本の成立は、それほど古くはないと言えるのではないか。

残りの〈京大1〉と〈筑土〉は、上記の諸本に対して、いずれも孤立した本文をもつ伝本である。太子と夫人の国名からいえば、〈京大1〉は甲類、〈筑土〉は乙類に属するが、記事にも文章にも、それぞれの類の特徴がほとんど出ていない。〈京大1〉は、「室町時代物語集第四」の解題で横山重氏が指摘されたように、本文に語り物の匂いが感じられる。古浄瑠璃や説経の正本との関係は認められないが、民間で語られていたものの詞章を伝えているのかもしれない。本文に誤脱が多く、本の体裁や書体から見ても、地方の民間で伝写されたもののように思われる。〈筑土〉は、諸本中もっとも簡略な本文をもつ本であ

る。この本は表紙の見返しに「此主福寿院」とあり、後表紙の見返しには「岩根沢日月寺門前／元文四年未ノ極月廿八日ニ調者也」と記してある。岩根沢は山形県月山の東南に当り、日月寺は同地の古刹である由を、横山氏も記されている。この本も地方で伝写された本物語の一伝本であることがわかる。一種の略本で、とくに古態を伝える本とは思われない。

なお、以上の草子としての伝本のほかに、「阿弥陀の本地」「阿弥陀四十八願記」「法蔵比丘」「法蔵比丘阿弥陀御本地」などと題して刊行された、古浄瑠璃・説経の正本が多数ある。現存する古い正本には、寛永二十一年と正保四年の藤原吉次の六段本「あみたのほんぢ」がある。この二本の本文は、草子の諸本の中で〈京大2〉系と特徴を同じくし、巻末はとくに〈慶應〉と合致する。その他の寛文以降の正本（説経を含む）は、藤原吉次正本とは筋立にも異なる所があり、別系統の本文を有する。各正本の間で小異同はあるが、大きく見れば、吉次正本に対して一類をなしている。こちらの方の本文は、部分的に〈刊本〉との類似の見られる所があるが、全体として草子の伝本との直接的関係を特定することはできない。この方にも説経系の古い正本があったとすれば、その本文の成立には問題が存する。以上、草子と古浄瑠璃・説経の本文上の交渉としては、〈京大2〉系と寛永・正保の藤原吉次正本との間に承接関係が認められるだけである。

「阿弥陀の本地」の諸本は上述の通りである。現存伝本には室町末期より古い写本は見られないが、諸本の間での本文の動きが非常に大きく縦の系譜を辿り難い所から考えて、作品の成立時期はかなり遡るのではないかと思われる。地域的にも、享受者層の面でも、広い範囲に拡散していたのであろう。

三

はじめに記したように、本作の素材となったと考えられる説話は、「今昔物語」巻五と、「覚禅鈔」に引かれる「大乗毘沙門経」に見ることができる。「覚禅鈔」に載る記事は左のごときものである。

大乗毘沙門経云。東城国普賢王太子善生。西城国勝迦羅王女阿皺女成二夫婦一。勝迦羅王云。我女子一人。善生過二三年一必可レ譲レ国。爰後母聞レ之。触レ事悪二善生一。取レ財返レ父。母病三年不レ還。阿皺女生二二子一。〇後母責曰可レ往二父国一。仍出行。阿皺女受レ病。二子遺言死〇爰善生。以二財宝一還来。聞二二子言一。捨レ身発二菩提心一。善生今千手観音。阿皺女吉祥天。二子多聞持国。云々

右の話を「今昔」説話と比較すると、ほとんど同内容で、やや違うのは、「今昔」では、善生人は善見菩薩、阿就頭女は大吉祥菩薩、二子は多聞天王・持国天と顕れたとあるが、「大乗毘沙門経」は、善生は千手観音と現じたとする点だけである。「今昔」説話が、この「大乗毘沙門経」の類を原拠にして成ったことは疑いないであろう。そして「阿弥陀の本地」もまた、かかる仏教説話を中核にして、一篇の物語に仕立てたことが明白で

ある。

そこで「阿弥陀の本地」の成立に関して問題となるのは、本地の対象として弥陀三尊と薬師を選んだことである。これについては今野達氏が、弥陀三尊が現世では親子であったという前生説話として「阿弥陀鼓音声王陀羅尼経」「悲華経」あるいは「宝物集」所載の早離・速離説話を挙げられ、さらに弥陀三尊と薬師との結合についても、「四仏の結合は、我が国における薬師信仰の歴史からいっても当然である。」とされて、四仏の結合が熊野信仰と一緒になった例として、「三国伝記」の「熊野権現本縁事」に見られる記事を指摘されている。(注3) その今野氏の所説によって充分に説明がつくと思うが、とくに本作の成立に関しては、熊野信仰が重要な意味をもつのではないかと考えられる。

本作では、薬師と顕れたのは、あしゆく夫人であるが、薬師仏は一般に男性と考えられていたごとくで、「神道集」の本地物諸篇においても、本地仏が薬師である神に物語中の女性を配した例は見られない。本作では、夫人が旅の空で病いに倒れ、太子との再会を遂げられなかったその悲しみの故に、薬師と顕れて衆生の病苦を救う誓いをたてたと叙べている。確にここでは薬師が最もふさわしい仏であると言える。しかし、本地物の通例では、物語中の女性には観音を配することが圧倒的に多い。その意味で、この物語は異例といえるのであるが、そこで想起されるのが熊野の本地仏である。熊野三所権現の本地は、平安末期以来、証誠殿を阿弥陀、結宮を観音、速玉宮を薬師としていた。「熊野の本地」の物語においても、「神道集」や古態の物語草子諸本は、この本地説を踏まえ、証誠殿に喜見（またはちけん）上人、速玉宮に摩訶陀国の善哉王、結宮に五衰殿后を配して、垂迹を叙べている。「阿弥陀の本地」の作者は、このような熊野の本地仏の関係を意識して、本地物としての結びの形を構えたのではないかと思われるのである。

本作が「熊野の本地」と関係をもつことは、「厳島の本地」との関連においても考え得るところである。「厳島の本地」も物語の前半部は「大乗昆沙門経」や「今昔」の善生人説話によって想を構えている。「厳島」の方が部分的ではあるが、原説話に忠実な形で取り入れているのを見ると、「阿弥陀の本地」を介しての移入ではなかったと考えられる。別個に善生人説話を本地物語の構成材料として利用したのであろうが、両者が同じ説話を素材に使ったのには、その間に共通する基盤があったからではないか。「厳島の本地」の後半は「熊野の本地」をそのまま借用し、前半の善生人説話に拠る部分につなぎ合せた形で物語が作られている。主要な部分は後半にあるので、いわば「熊野の本地」の改作といってよい作品である。そのように「熊野の本地」に密着した「厳島の本地」が、善生人説話を改作の材料に使ったことと、同じ説話を全面的に利用した「阿弥陀の本地」が、熊野の本地仏である弥陀・観音・薬師を対象としたこととの間には、深い関連がありそうに感じられるのである。

さらに物語の内容においても、「阿弥陀の本地」は「熊野の本地」の影響を受けたと思われる部分がある。「阿弥陀の本地」

が、素材とした善生人説話と筋立の上で最も大きな相違を見せている個所は、せんしやう太子があしゆく夫人と結ばれて後、夫人と王子を山中に残して故国へ帰るに至る間の叙述である。善正人説話では、西城国の王は女の阿鍛女（阿就頭女）と善生の結婚を快く許したが、阿鍛女にとって継母であった母后は善生に辛く当った。そのために善生は懐妊の身の夫人を残して東城国へ帰ったとある。この所を「阿弥陀の本地」は、あしゆく夫人が素姓の知れぬ修行者姿の太子と契ったことを怒った父王は、二人を死罪に行なうように命じる。二人は山中で殺害される所を武士の情けで助けられ、乞食をして露命をつなぐうち、王子が二人続いて誕生する。数年の後、王子の将来を考えた太子は、夫人と王子を残して、いったん故国へ帰る、という筋に改め、劇的な脚色を加えたのである。今野氏は、ここに熊野や厳島の本地譚に見られる山中受刑譚と、継子物語に多い継子殺害譚の流入を説かれた。今野氏は特に継子物語との関係を重視されているが、「阿弥陀の本地」では、原説話の阿鍛女の母が継母であったということには全く触れていないことからすると、作者の頭にあったのは「熊野の本地」や「厳島の本地」であったのではなかろうか。〈京大1〉には、山中に捨てられた太子たちに、山の獣が食物を運び、日夜守護をしたという記事がある。これは後に加わった記事であろうが、この物語を聴く人に、「熊野の本地」における類似の場面を想起させたことを示しているのであろう。

以上のように「阿弥陀の本地」は直接熊野信仰に触れてはいないが、「熊野の本地」の影響を受けて成った作品であったと思われる。「熊野の本地」をはじめ、「神道集」に載ったような古い本地物語は、修験道関係の遊行宗教家の手によって成り、管理伝承されていたことが明らかであるが、この「阿弥陀の本地」も、そういう本地物語と作者層を同じくしていたものと考えられる。ただ「熊野の本地」は、「神道集」に載せられていることや、物語の中に作者の投影とも思われる法華聖が登場することから見て、天台系修験が関与した作品であったと推測することができるが、「阿弥陀の本地」に関しては、〈京大2〉に、善生太子が二人の王子と共に諸国修行に出た時、ある山里で出会った老僧を師として剃髪し、法名を阿弥陀・観音・勢至と授った。その僧は実は大日如来であったという記事がある。「神道集」の本地物語には、物語中の人物が終りに神から神道の法を授かって神明と顕れたとする記事が見える。大日如来を師として剃髪し、法名を授かったとする右の記事はそれに似通っているが、大日如来によって仏菩薩と顕れることを約束されたというのには、真言系統の宗教者の口ぶりが感じられる。この記事は〈京大2〉の一本だけに見えるものであるから、やはり後に加わったものと考えるべきであろうが、この本地物語が真言系統の宗教者の間に伝わっていたことが、右のような記事を増補せしめたと想像することはできよう。筆者は先に「諏訪の本地」における兼家系と諏方系の二種の伝本の関係について、真言系修験の間に伝わっていた兼家系の物語を、天台系修験が改作したのが諏方系の物語であったとする推測をしたことがある。(注4)

「熊野の本地」と「厳島の本地」の間でも、厳島は鎌倉時代以降弘法大師信仰が顕著で、真言宗の支配下にあった所からすると、「熊野の本地」の天台系に対して「厳島の本地」は真言系修験の手に成る作品であった可能性がある。そして、「厳島」と「阿弥陀の本地」が同種の説話を物語の素材に使っていることを併せると、全くの臆測になるが、「阿弥陀の本地」の作者層も真言系修験ではなかったかと考えられるのである。

「阿弥陀の本地」の物語の中で、あしゆく夫人が二人の王子を連れて遙な太子の本国へ赴く途中、病いに倒れてはかなくなるというくだりは、聴く者の胸を強く打ったことと思われる。このように夫を尋ねて女性が辛苦の旅に出ることを構想の中心に据えた作品は室町期の物語にたいへん多い。「神道集」の「児持山之事」や、それと関係の深い「浅間の本地」をはじめ、本地物の形式はとっていないが、「明石物語」「堀江物語」「村松物語」「はもち」「師門物語」等は、いずれもその種の物語である。しかも、これらの物語の多くには、熊野信仰にかかわる伝承文芸としての性格が濃厚に見られる。(注5)「阿弥陀の本地」と、この種の物語群との交渉を具体的に指摘することは難しいが、物語の成立、伝承の地盤が共通していたことは言えるのではないかと思う。

(注1) 今野達氏「今昔物語集巻五第廿二話伝承の展開(一)—阿弥陀の本地の成立をめぐって—」(「国語」第五巻第一号)

(注2) 本田義憲氏「今昔物語集本朝世俗部二」(新潮日本古典集成)解説—「辺境」説話の説

(注3) 今野達氏前掲論文。「三国伝記」には次のような記事が見える。

役優婆塞ノ曰ク、閻浮提守護四神王イマス、一ヲバ妙徳円満ト曰フ、摩訶陀国正中ニ在マス、本地弥陀如来、日本国ニテハ証誠大菩薩ト名ク、〔二ヲバ〕北辰ト曰、閻浮ノ北ニ在リ、本地薬師如来也、日本国ニテハ熊野権現ト名ク、三ハ大天、四ニハ白太ト曰フ、此二神ハ兄弟ナリ、補陀落山ニ有テ本地観世音也、日本ニテ那智権現ト名ク

(注4) 松本隆信「中世における本地物の研究(三)」(斯道文庫論集第十三輯)

(注5) 松本隆信「本地物周辺の室町期物語—明石物語ほか武家物語篇について—」(「国語と国文学」昭和五十四年六月号)